



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2024第890回

R6/12/31

2024 大晦日スペシャル

「今年の総括－世界と日本 PART2」

パネリスト：

石井孝明（ジャーナリスト）

掛谷英紀（筑波大学システム情報系准教授）

ジェイソン・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）※リモート出演

竹内久美子（動物行動学研究者）

原口一博（衆議院議員）

室伏謙一（室伏政策研究室代表・政策コンサルタント）

吉野敏明（日本誠真会党首・医療問題アナリスト）

司会：水島総

\*\*\*\*\*

水島「皆さん、今晚は」

一同「(礼)」

水島「いよいよ押し迫って参りました。2024年、令和6年が終わりますけれども、今日は闘論！倒論！討論！2024大晦日スペシャルとしまして『今年の総括—世界と日本Part2』ということで、先週と別の方々に出て貰いまして、先日、この討論しました、特にシリア、中東情勢、外交的な問題の方を割と主に議論したんですけれども、それに比べると日本の情勢はどうだというような形が結構、突っ込んだ話で殆ど他のチャンネルや色んなところでは話されないことが語られたんじゃないかと思います。

そういう意味で、来年は、いよいよトランプ前大統領が大統領に就任する。様々な政策やイメージを打ち出している。そして、今日、ご出演なさっている原口さんは明治製菓ファルマから訴えられると。この間、我々が街頭演説をした中継ビデオもYouTubeからカットされました。カットというよりバンされました。こういうような意味で言論というもの、本当のことを伝えるっていうことが中々困難な時代になって来ている中で、この『闘論！倒論！討論！』は出来る限り言論の自由、表現の自由を守るっていうことで、今年もやってきました。お陰様で、皆さんからご支持を戴いております。

今日は今年の総括ということで、皆さんのご意見を伺いたいと思います。まず、ご出席の皆さんをご紹介します。動物行動学研究家の竹内久美子さんです。宜しくお願いします」

竹内「宜しくお願い致します」

水島「衆議院議員の原口一博さんです。宜しくお願いします」

原口「宜しくお願いします」

水島「原口さんは前半だけのご出演ということで、公務の方に戻られます」

原口「はい」

水島「そして、日本誠真会党首、医療問題アナリストの吉野敏明さんです。宜しくお願いします」

吉野「はい。宜しくお願いします」

水島「筑波大学システム情報系准教授の掛谷英紀さんです。宜しくお願いします」

掛谷「宜しくお願いします」

水島「ジャーナリストの石井孝明さんです」

石井「宜しくお願いします」

水島「室伏政策研究室代表、政策コンサルタントの室伏謙一さんです。宜しくお願いします」

室伏「宜しくお願い致します」

水島「そして今日はスカイプのご出演です。歴史学者で麗澤大学国際学部准教授のジェイソン・モーガンさんです。宜しくお願いします」

モーガン「宜しくお願いします」

水島「今日は、このメンバーでお送り致します。まず、今日は、それぞれ色んなお立場の方がいらっしゃる訳ですけど、今年の日と世界をどういう形で見ているか、そういう印象から受けて、そこから問題点を挙げながら話し合ってみたいと思います。では、竹内さんから、宜しくお願いします」

竹内「はい」

水島「今年は、どんな年でしたか。世界、まあ、個人でもいいですけど」

竹内「まず、私は世界までは、あまりよく分からないですけども、私個人としましては専門の動物行動学の勉強プラス、私の興味が一番、向いている皇統の問題をウォッチしていました」

水島「はい」

竹内「まずは、つい最近、秋篠宮家の悠仁親王殿下が筑波大学に推薦入学されたっていう大変、おめでたいニュースがありましたけど…」

水島「はい」

竹内「非常に変な噂が、いっぱい飛び交ってまして、もう紀子妃殿下が何としても悠仁さまを東大に入学させたいんだって決めつけて、あの方は見栄っ張りだからとか（失笑）大学に拘るみたいなことを言って、それがどういう組織か分かりませんが、赤門ネットワークなる組織で、悠仁さまの東大進学反対署名活動っていうのをしまして…」

水島「5万人、集めたと言っていますね」

竹内「あ、1万人ぐらいでしたかね」

水島「うん」

竹内「何かよく分からない。でも東大へ、それを持って行ったら突き返されるに決まっていますね」

水島「当たり前ですけどね」

竹内「それとか、悠仁さまの進学に合わせて東大の農学部が新しく校舎を改装してとかなんとか、また金を使ってとか、酷いことをいっぱい言われていたんですけども、私が考えるには、悠仁さまは、これまでにトンボと稲の研究を相当、為さっている訳ですから。そうしたら大学は、そのトンボと稲の研究が一番、よく出来る大学とか、この先生に師事すれば一番、よく勉強できるとか、そういう観点で選ばれると思っていました」

水島「うん」

竹内「だから結果として東大っていうこともあるかもしれないけど、大学名を出していいですか」

水島「うん」

竹内「恐らく東京農業大学とか東京農工大学、その次に筑波辺りを、私は考えていました、それで筑波となりました」

水島「うん」

竹内「それで、また筑波となったらなったで、今度は筑波の大半の先生が悠仁さまの進学に反対していると。在校生も反対しているなんて、又、デマが出回るようになりました。掛谷先生は筑波大学の准教授でいらっしゃるから、もう重みがある訳で掛谷先生がXで、皆さん、歓迎しているんだってということをおっしゃって下さって、少し逆襲が出来ましたけれども、またまた、その筑波に通うに、又、凄い距離を毎日、車で通うのかとか何とか、またまた酷いケチが付きまして、去年ぐらい迄は、色んな勢力がそういうことをやっている訳ですけど、一番、大きなのはお隣の国からじゃないかなと思っていました。

その兆候としては、Xの書き込みに日本語が不自由な人が書き込んでいるんですね。それから簡体字が時々登場するとか、それから皇族の雅子さまと紀子さまの区別がついていないとか（失笑）まあ、色々あったんですけど、とうとう今年に入った傾向としまして、例えば『ハッシュタグをつけて秋篠宮家は日本の恥』っていうようなものが出ます。でも日本のトレンドじゃないんですよ。アジア・太平洋のトレンドとして出ています。

これが『悠仁さま、おめでとうございます』とかのハッシュタグだと日本のトレンドとして出るんですが、どうして隣の国がそうやって何かね（失笑）、集団で出来る、どういうルートなのか、私には分かりませんが一応、こういうものが、ズバリ出る様になりました、いよいよもって日本の皇室を危機に陥れて日本から皇室を無くそうとする。それから、どなたでしたっけ、あの、よう、かい、えーと、かい…」

掛谷「はいはい、はい。あの静岡の先生ですよ」

竹内「はい。お隣の国のね。『最終目的は天皇の処刑だ』というタイトルの本まで書いておられるということで、それが明らかになった年であったなあという風に考えます」

水島「はい、なるほどね。ついでに年末に出ましたCIA週刊誌、週刊文春ですね。段々本音をしっかり書いています。『悠仁さまを揺さぶる「愛子天皇」極秘計画』（苦笑）『愛子さまに相応しいY染色体を持つ旧皇族の青年を』と。総理が懐刀に指示し、女性天皇誕生に向けた計画』ね。もう文春は色々頑張っていますよ」

竹内「そうですね」

水島「はい。今、その適応の旧宮家の青年が2名程、いらっしゃることで、この方に敬宮愛子内親王殿下とご結婚して戴いて、そうなると、どうだ男系は続くじゃないかみたいなことをやりたい訳ですね。本当にGHQから始まっていますね。これと、反日反抗する週刊誌の、もう一つの週刊新潮。これも年末に出たものですけども、はい。こちらは『加速する「皇室離脱」願望に、秋篠宮さまの胸の内』というね、30歳になられましたから結婚なされば、どなたも女性の皇族の皆さんは、一般の民になる訳ですけども、『離脱』という言葉、自分から離脱したがついているみたいなね、そういうことなので、まあ、こういうことを週刊新潮は立派で、週刊誌は1年で52週ありますけれど、ほぼ48週、秋篠宮家の誹謗中傷をずっとしてきた。誠に見上げたもんで、週刊文春の方も負けずに半分以上は、皇室誹謗中傷をやってきた、週刊文春と週刊新潮、これは誠に皇統断絶っていう伝統

的な流れになっています。

つまり一番の問題は、女系天皇とか、そういうものは基本的なところでは皇統断絶を狙っているってことで本当に一致してやって来たのを、ご入学なさるってということが決まって多分、相当、焦っているんじゃないかと」

竹内「はい」

水島「本当に立派にお育ちになっているのでね。ということですが、これも、やはり情報戦、超限戦の一種の中で、この週刊文春がやっている。だから、皆さん、これは、まあ、せっかくだから途中ですけど」

竹内「はい」

水島「週刊文春を見ると、アメリカのネオコンやそういった勢力が今、日本に何を望んでいるかが、よく判ります。安倍さんの時は菅さんが一回も批判されていないんです。私は8年間、見ていて、安倍批判は散々やってきたけれども、菅義偉批判は一切ない。ということとか、よく見て行くと表れているので、是非、買わないで立ち読みして戴くと思いますね」

一同「(笑)」

水島「はい。ということで、この皇統の問題は段々、あからさまになってきましたね」

竹内「はい」

水島「焦りの象徴でもあるかも分からないしね」

竹内「多分」

水島「はい。ということです」

竹内「はい」

水島「では続きまして、原口さん、宜しくお願いします」

原口「はい。今のお話を聞いて憲法1条を読んだことがあるのかと。『日本国の象徴』を何だと思っているんだと思いますね。だから拝米タイムスが居て、また日本を内から壊す者が居るってことです。竹内先生、また宜しくお願いします。

それで、僕の1年は仲間を待つ1年でした。ホップ、ステップ、ジャンプで、『日本独立!』という本を書かせて戴きましたが、今年のスタートは吉野先生との『癌になった原口一博が気づいたこと』

水島「そうだよ」

原口「その次は『プランデミック戦争』そして『日本再興』という本を出して、一番、終わりが『日本独立!』ですね。さっきも室伏先生とお話ししていただんですけど、何と、ある金融機関が来年6月15日に株を全部、売っばらうと」

水島「うん」

原口「これって水島社長、1990年代、長銀とか日債銀がございましたね」

水島「うん」

原口「あれは、要するに長期の育むマネーで日本を強くするものだった。それをどんどん弱くして結局、売っぱわれてしまった」

水島「うん」

原口「そういう金融の面からでも、ブラック・サンタクロースっていうか耳が尖んがっていて、お尻に三角の尻尾が付いているような人達が日本に来て、まあ、やりたい放題をやった、この1年ですね」

水島「そうですね」

原口「それに対する意識というか、それが国民の間でも大分、解って来た、そういう1年だったと思います。私は『憂国連合』というのを創って、日本独立、日本再興、それから日本救世ですね。これはYouTubeで流れているから明治なんかについては言いませんけれども、ああいう人達が、とにかく、ありとあらゆるデータを隠していった時でもあったと思うんですね」

水島「そうですね」

原口「それに対して、水島社長に先頭になって戴いて色んな集会をやりました、4月13日も5月31日にも。だけどメディアは全て無視でしたね」

水島「そうですね。何万人も来たってね」

原口「何万人、来ても無視」

水島「うん、無視です」

原口「ただ、それは海外では物凄くて、今回のやつも日本じゃ何か僕が提訴されたっていう、そこだけ、何故か、そこばかり毎日、流れていますけども、海外は、また、全然、別に流れているんですね。

だから、そういう意味じゃあ、国内のディープステイトぶりと海外のトランプさんを中心とするディープステイトと戦う流れが非常に明確になった。そういう1年でもあったと思うんですね」

水島「そうですね」

原口「だから、そういう意味では『夜明け前は一番、暗い』って言いますけども、暗かったんだけど来年は新しい良い年になるだろうし、そうしなきゃいけないし、外国勢力って言うか、それを徹底的にやっつけていかなきゃいけない。一番、やっぱり巢食っているのが金融のところだと思うんですよ」

水島「うん」

原口「金融のところ。ここが弱くて、やりたい放題やられて日本の企業が喰われまくって売られまくって、買われまくって、そして買ったはいいいんだけど、今度はケイマン島とかにある会社に転売されて、そして技術も百年以上続いた企業が今、どんどん喰われまくっ

ている」

水島「そうですね」

原口「ちょっと法律を今、いくつか用意しているんですけど、これを来年こそは炙り出して逆転にもっていくと」

水島「うん」

原口「この間、『グローバリズムと戦う超党派議員連盟』っていう超党派議連を立ち上げて原譲二さんに基調講演をして戴きました。吉野先生にも来て戴きましたけども、あれは、一部と二部があって、ですね」

吉野「はい」

原口「それで二部の方は、例のYouTubeで言えない方がメインだった訳ですけど、一部の方は公益資本主義っていうか結局、アメリカも失敗した訳ですよ」

水島「うん」

原口「ジェイソン・モーガン先生が、よくおっしゃいますけど、モーガン先生がお育ちになったような古き良きアメリカ、そのアメリカが中間層をどんどん無くして行って…」

モーガン「(頷く)」

原口「内側から溶けていく訳ですね」

水島「うん」

原口「それに対抗して公益資本主義っていった原譲二さんの講演は今、100万回以上、再生されている」

水島「ああ、そうですか」

原口「ええ」

水島「ほお」

原口「それで公益資本形成をして日本を立て直すと。この間、一人当たりGDPが台湾にも抜かれましたね。もう、とんでもない日本弱体化装置を拝んでいる人達と、そうじゃなくて、それをぶっ壊していこうという人達と明確に分かれた。総選挙もあった訳ですけど、総選挙で言うんだったら、第一党があんな具合ですから、本当は第二党が伸びなきゃいけなかったんだけど、それは立憲ですね。だけど立憲は伸びていないんですよ。比例で言うと7万票。小選挙区で、なんと150万票も落としている訳です。

今回、新人が38人、受かっているんです。ところが殆ど比例ですよ。どれだけ弱かったかっていうことです。これだけ風が吹いているのに」

水島「そうだよ」

原口「ええ。さっき出る時に玉木さんとすれ違いましたけども、やっぱり勝ったのは国民の手取りを増やすっていう、明らかに日本を再興させる政策を言ったところですよ。恐ら

く来年は衆参ダブルになると思うんですね。今年は衆参ダブルになる中で新しい塊、政治勢力を、ホップで仲間が戻って来るのを待った。それで大分、戻って来た」

水島「うん」

原口「だけど、それでは足りないんですね。裏金の問題も来年は、また新たな展開になると思うんですよ。まあ、可哀想な人も居ますよ。名前を言っちゃ悪いけど、平沢さんみたいに、たまたま、そのポストに居てという人も居るけども、でも、やっぱり構造的に外国人パーティ券といったもので賄っていたっていうのは火を見るより明らかですからね。

政策が日本を向いていないんですよ。この間、財務金融委員会があつて、自民党の国会議員が珍しくって言うか、まあ、失礼ながら、いい話をしたんですよ。在日外国人に対する消費税って免除されている訳ですよ。大体1600億ぐらい。それに対して日本は何をやっているかって言うと、去年はインボイスを入れた年ですね」

水島「そうですね」

原口「インボイスが1700億です」

水島「腹、立って来るね」

原口「腹、立つでしょ」

水島「(苦笑)」

原口「これでね、漁業だとか農業だとか、それから伝統の一人で文化を守っている人達が物凄く潰れていったんです」

水島「そうです」

原口「まあ、お金に色はついていないけど、外国人に1600億円の消費税を免除するんだったら、インボイスを取らなきゃいいじゃないですか。それで日本の文化を潰している、とんでもない話だと思うので、来年こそはインボイスも消費税も無くして、そして、日本を明るく温かい国にしていかなきゃいかんなあと思っています。

1月20日にトランプ政権が誕生しますから、この間、シーパックジャパンっていうのに呼ばれて講演したんですよ。そうしたら、ビックリしたことに自民党の議員が一人も来ていない訳ですよ」

水島「そうなの」

原口「一人も来ていないんですよ。ああ、長尾さんだけ来ていました。でも議員じゃないですよ」

水島「まあ、浪人中なので、これからの人ですからね」

原口「ええ、浪人中だから。長尾さんだけ来ていて、それで口々に言っていたのは、自民党の人も呼んだんですけど。でも、行くなと言われてる。それから大臣とかも祝電を出すと言われてる。今からトランプ政権に、どんな風に対応しようかなんて言っていたら、それは振り回されて終わりですよ」

水島「うん。そうです」

原口「そうじゃなくて日本はこっちに行くんだから、それで一緒にやれと」

水島「うん」

原口「僕も年明けに、例の足引っ張りが無かったらアメリカへ行くつもりだったんですけど、丁度、2週間ぐらいで訴状が届くらしいんですよ」

水島「ああ、そっちの方で行けなくなった」

原口「そっちで行けなくなって」

水島「なるほどね」

原口「そのあと尖閣の日が1月14日ですね。これは毎年、行かなきゃいけないで、20日過ぎから通常国会ということ。結局、1月には行けない。2月にシーパックがあるので、そこには行こうと思っているんですけど、いやあ、ちょっと対トランプ政権で、何か日本の人は6割が不安に思っているって、何故だろうと思えますね。逆に戦争屋をやっつけてくれて日本は楽になるだろうになあと思うんですけど、今の石破政権の対応だと厳しいなあっていうのが正直なところですね」

水島「うん。まあ、そうですね」

原口「早く衆参ダブルで倒して新しい勢力を、それこそ日本の古い伝統や文化を中心にしたところをつくっていかなくちゃいかんと思っています。最後に吉野先生には大変、お世話になったので、お礼を申し上げたいと思います」

吉野「いえいえ（微笑）」

原口「吉野先生に診て貰った人が世界的に活躍していましたよ」

水島「ねえ」

原口「ちょっと名前は言えませんが。そして新党も、おめでとうございます」

吉野「有難うございます」

原口「以上です」

水島「まあ、そういうことですね。今言った問題もそうなんですけど、本当に石破さんの問題は、やっぱり今回、日中会談が行われて3時間、応対してくれたって喜んでいますが、現実的に覚悟を持って日中間を、きちっとさせていくならいんですけども、アメリカの大統領選が就任する前に中国の高官に会ったっていうことは、やっぱり、しっかり踏まえなきゃいけない。

別の討論でも出たんですけども、お前、うちのアメリカよりも先に中国の外務大臣と総理に会ったねって、これ、どういうつもりだと。何、うちはそれだけ軽く見られたのかって、内容は知っているけども、そういうことになったら一体、どうなんだろう。

それから岩屋さんっていう人がアメリカの方で汚職っていうか、こういう形で行ったら、逮捕されるかも分かんない。それを石破さんは彼を信じると、岩屋君を信じたいと言っている。それも、また大統領になる前の非公式な形でグリーンランドを寄こせ、パナマ運河を寄こせ、カナダは51州になれっていう、これはトランプの独特のあれなんでしょうけ

ども、こういうことを言われて、じゃあ、思いやり予算を2倍出せとかね、自衛隊に対して、本当にきちっと、うちは中国と仲良くしますからいいですって言えるのか。

そんな度胸も能力も、蚤の心臓の男が出来る訳がないんでね、こういうことを許しているっていうのは本当に、私は、これを態とやっているのかって思うぐらい、ちょっと危ない状態だと思いますね。

だから、今、原口さんが言った様に、この人、どうするんだっていうことを、ちゃんと、予算案が通ったらクビになるのか、でも彼は未だ、ずうっとやるつもりで居るんじゃないですか」

原口「う～ん」

水島「最近の様子を見ると、そういうねえ、直ぐ辞めますみたいな感じじゃないからね。そういう意味では、日本の状態が非常に混乱した状態のまま年を越すっていうことになると思うので…」

原口「500ドットコムの問題は、ないがしろにしていい、もう過去のもんだって言えるようなものじゃないですよ」

水島「そうですね」

原口「ええ」

水島「うん。おっしゃる通りでね。だから日本だと時効らしいんだけどね、アメリカでは時効っていうのが無いからね。いい度胸しているなあと言うよりも分かっていないんじゃないかっていう気がする」

原口「いやあ…」

水島「この問題は、ちょっと、そういう気もするので、これは、また話が出たら、ちょっと話したいと思います。では、吉野さん、お願いします」

吉野「はい。日本時間で昨日、トランプがWHO脱退ということで、これは元々2020年7月6日にトランプがWHO脱退という大統領令で出した訳ですよ。そのあと明らかな選挙でバイデンになって、バイデンが就任して1日目の、いの一番でやったことが何かって言ったら、この大統領令を消す大統領令を出したと」

一同「うん」

吉野「つまりバイデンを無理矢理、大統領にさせたのは、これが目的だった訳ですよ。つまり絶対、阻止されては困ることだった訳ですよ」

水島「そうですね」

吉野「トランプは恐らく暗殺をされない限り、これは進むと思いますし、それ以外の話もある訳ですけども、これは医療の問題じゃないので、私がいつも政治と経済と医療っていうのが本当は、ずうっと混ざっていた話だと。水島社長とも一緒にニコニコに出させて戴いた時も、実は貿易とか金融よりも、もっと前に1800年代ぐらいから仕掛けられている罠があって、それが医療のことっていうのを学者も知らない、それから政治家も知らない、分析家や評論家、アナリストも知らないのをいいことに分断工作をして、やりたい放

題やっていた、所謂、メディカル・インダストリアル・コンプレックスですよ。

医療産業複合体の完成を図ろうとしていたのが、今回の新しい病気の注射騒ぎだった訳です。それを何とか止めてくれそうな人が出てきた2020年にそれを潰す為に、大統領を無理矢理、バイデンにしたと。認知症の人を大統領にしてしまったと。

これは、もう1999年に鬱は心の風邪だとキャンペーンをして、SSRIという向精神薬をもう数兆円かけてキャンペーンをして、今のワクチンと同じですよ。ワクチン注射と同じでやって、たった1年で向精神薬を使う精神疾患の患者が65倍も増えて売り上げが1千6百倍になったという、とてつもないことをやった訳です」

水島「ああ～、ねえ」

吉野「抗癌剤も全く同じことですね。ご存じのように、1990年代からアメリカ、ヨーロッパは癌の患者が減り続けている訳です。もう20～30年経っている訳ですね」

水島「これは、もう事実だからね、うん」

吉野「事実です。日本だけが1万人ずつ癌による死者が増えている訳です。これは物凄いビジネスです。金融以上にお金が儲かって、百兆円単位で動いている訳ですし、この注射騒ぎの時も、ファイザーとモデルナの注射液を買うが為に97兆円も貨幣を発行した。国家予算の一般会計が約百兆だから、さっきの消費税の話じゃないけども、消費税は20兆ぐらいですよ。消費税5年分ぐらいの金をぽ～んと作って、外国企業にあげるなんていうことは金融でもやっていないことですよ。

だから、これが1990年代から仕掛けられていたんですが、実際は、もっと前から仕掛けられていたんですね。それはGHQが入って医薬分業というのをやるというクロフォード・F・サムス (Crawford F. Sams) 准将がやっていたんですけど、そこから始まっているので、もっと厳密に言えば、明治からやられている訳ですけども、いよいよ、これが、完成しそうになってしまって、親米自民党がこのシステムを作るのに大いに加担していた訳ですよ」

水島「うん」

吉野「これは、さっき原口先生や水島社長がおっしゃったように、じゃあ、共和党になったら親米自民党と一緒に脱退するんですか」

水島「そうなんだよ」

吉野「貴方達は親米なんですよ。ちゃんとトランプと仲良くするんですよ」

水島「そうなんだよね」

吉野「だから親米じゃなくて親ディープステイトだったんじゃないですかという話がバレるかもしれない、いいチャンスになっている訳です」

水島「そうですね」

吉野「だから何が何でもトランプが暗殺されないように日本人は守らなきゃいけない」

水島「うん」

吉野「これが暴露されたら色々な通信の問題や、監視カメラの問題とかルーターの問題、もう、ありとあらゆる手段を使って、彼らは我々をスパイしている訳ですけども、実は注射騒ぎの時に顔を見て温度を測るのがあったじゃないですか」

水島「ありましたね」

吉野「あの情報を全部、中国に流した」

水島「ああ、そうなの」

吉野「そうですよ」

水島「それは初めて聞いたなあ」

吉野「あれはファーウェイのチップが入っているんですよ」

水島「ああ〜」

吉野「それで日本人が何処にどうやって行動しているのかっていうのを抜いていた訳ですよね」

水島「なるほどねえ」

吉野「だから、そういうことと、それからWHO脱退のこともそうですけども、出来れば日本も、この時だけは親米でいいですよ。WHOを脱退して（笑）」

一同「（笑）」

吉野「本当は国連も脱退しなきゃいけないんですよね」

水島「うん」

吉野「本当はね。だけどトランプがWHOを脱退して、お前、日本はどうするんだっていう踏み絵を踏む、だったら一瞬だけ親米でもいいと思いますけどね（微笑）」

水島「うん。いや、全くね、うん」

吉野「ええ。厚生労働省は、まあ、国ですよ、国が認めたのが、この10月時点で注射で死んだというのが934名も居て、審査待ちが1400人を超えている訳ですから、このままだと恐らく殆ど通る訳ですよね」

水島「うん」

吉野「そうすると、予防接種ですよ、恐らくであろう来年は注射で2千名以上の人が死ぬっていう、まあ、殺人を犯している訳ですよね」

水島「うん」

吉野「これ以上、強くは悔しいけど言えないですが。日本人が日本人に注射して、日本で作っているものを、他の国が誰もやってないというジェノサイドをやっている訳ですよ」

水島「うん」

吉野「これを止めることが、やっと出来る人が大統領になるかもしれないから、もし石破

さんが本当に親米だって言うんだったら、私も、は～い、注射、やめます、脱退します」

水島「うん」

吉野「やって欲しいですよね」

水島「うん、要求したいですよね」

吉野「要求したいですよね」

水島「うん。もっと言うとね、そのところで大変、いいことを言ってくれたのは、例えば、国家基本問題研究会の櫻井よしこさんは『トランプを再選させる訳にはいかない』」

吉野「うん」

水島「『ウクライナを負けさせるわけにはいかない』とか立派なことを言ったんだからね、どう落とし前つけるか」

吉野「全くそうです」

水島「今、言わなきゃいけないですよね」

吉野「だからね、今こそ立場を明らかに暴露する時が来て、保守っていう皮を被っている嘘つきがいっぱい居る訳ですよ」

水島「そうです」

吉野「だから靖国神社に行ったから保守だとかね（失笑）」

水島「うん」

吉野「親米だから保守だとかね」

水島「うん。反中を言えば保守とかね」

吉野「何も関係ないですよ」

水島「本当に関係無いんですよ」

吉野「この国の土地だとか水だとか、勿論、人間もそうだし山も川も海も何もかも守らなきゃいけない訳ですよ。特に人命ですよ。それを今の自民党っていうのは日本国民を大量虐殺しているっていう状態だから、ここから脱出するいいチャンスだと僕は思っていますけどね。でも、もし、これでチャンスを生かせなかったら、もう日本は潰れてしまいますよ」

水島「今言ったWHOの脱退を、トランプさんが言ったのは、そりゃあ、是非ね、友好国だから、同盟国だから」

吉野「そうですよ」

水島「本当に言う事を聞いて、私達も一緒にやりますって言って貰いたいですね」

吉野「だから、ここで確かに、もう日本中の莫大な利権ですよ。もう、それこそ武田製薬だって6割、7割ぐらいの株を外国企業が持つてる訳だし…」

水島「そうですね」

吉野「あれも日本トラスト信託銀行とか、日本マスタートラスト信託銀行とか信託銀行が持っていたら誰が持っているか公開出来ない訳ですから。でも、そもそも日本で一番、大きい会社は外国人が社長になっていると」

水島「そうですね」

吉野「この規模が、核兵器だとか原子力潜水艦レベルよりも、こっちの方が大きな金額になっているので、だから医療安全保障が軍事安全保障よりも金額が上になっているっていうことを日本人が知らないの」

水島「うん」

吉野「だから、これが本当に、この国を守らなきゃいけないことになっている。だから、結局、政治と医療を分断したツケが回って来ている。やっと、ここで解決できるかもしれないチャンスが来年、来るということだと思います」

水島「そうですね。それも大変、大事な指摘だったと思うし、意外と、ここは知られていなかった。今日、丁度、ニュースで言ったのは、あの紅麴の製薬会社」

吉野「うん」

水島「やっぱり香港ファンドが入って来て大株主になったって。狙いはそこだったって言うかね」

吉野「そうですね」

水島「結局、そういうことですよ。こういうのが段々明らかになってきたのはいいことだと思います」

原口「サメから船は見えるけど、船からサメが見えないんですよ。あの5%未満のやつ。資本のね、それをやられてます」

水島「それもあるねえ」

原口「サメ退治をちゃんとやらないといけませんね」

水島「因みに香港ファンドは10%以上だったと思いますね」

原口「うん」

水島「まあ、色々分けてやるってことが出来るから」

原口「そうですね」

水島「はい。では、掛谷さん、お願いします」

掛谷「はい。ちょっと最初に一点だけ、先程、竹内先生が悠仁殿下の話がされたので、私は単に大学の大半の教員が反対だみたいなことがあって、そういうことは全然、起きていないので、起きていませんという具合なことを言っただけですが、それより、私は、この件で素晴らしいと思ったのは筑波大付属の同級生達です」

水島「うん」

掛谷「同級生達が結構、Xで発信していて、例えば、表現は不謹慎という言われ方をするかもしれませんが、書いてあったのは『いや、悠仁は頭が良くて優しい奴だよ』とか、或いは、『この前、期末試験で会ったので、おめでとうって言ったら有難うって言っていた』とか、そういうようなことが沢山、出て、且つ、偽物だろうって言ったら生徒手帳まで探したり…」

水島「ああ、いいねえ」

掛谷「だから本当に素晴らしい御学友に恵まれている。だから、勿論、そういう声を引き出させる悠仁殿下の人格、お人柄というのもあるでしょうけども、私は、その高校生達が、みんな、高校3年生、受験生ですよ」

水島「うん」

掛谷「そういう中で、そういう発信をするっていうことに、まあ、それは別に言われてしていなくて自発的にやっているように見えるので本当に感動しました」

水島「うん」

掛谷「薄汚い大人が沢山、居る中で本当に素晴らしい高校生達、今の若い人達は、本当に素晴らしいなって感動したっていうのがありました」

水島「そうですね」

掛谷「はい。それで今年の総括っていうことなので、何と云っても、もう既に何度も出ていますけど、やっぱりトランプ大統領の勝利」

水島「うん」

掛谷「且つ、やっぱり上院も下院も共和党が取った」

水島「うん」

掛谷「やはり、これは非常に大きいことで、来年は非常に期待できると思っております。それで前回、11月末ぐらいに出演させて載いて、その時点で、保険行政の閣僚が何人か決まっているっていうことでご紹介しましたけれども、そのあと、一番、大きなのは12月2日付で、まあ、書類には4日と書いてあるんですけども、アメリカの下院で新型コロナパンデミックの特別小委員会のブラッド・ウェンストラップ (Brad Robert Wenstrup) 委員長の下で五百数十ページの報告書です。五百数十ページなので、私も全部は読んでいないんですけど、その内の170ページが、まあ、この番組で何回もご紹介した新型コロナウィルスの起源の話になっていまして、そこに関しては、ざあっとは拝見しました。

勿論、あれは公聴会とか今迄の取り調べの纏めなので、私は公聴会を、ほぼ全部、見ていますし、所謂、Transcribed Interviewという聞き取り調書に関しては勿論、全部は膨大なもので、それは全部を読んではいませんが、基本的には、そのレビューなので、まあ、知っていた内容が多かったです。

一応、オフィシャルに研究所起源の可能性が最も高いと、Most Likely だっという結論を出したということで、日経新聞なり共同通信も少しは、それを報道したということは少し

効果があったでしょう。ただ聞いてみると、そういう報道があったということは、殆どの日本人は知りませんよね。これは、やっぱり非常に大きかったと思います。

そのあと、実は殆ど、まあ、ほぼゼロで日本では報道されていないんですけど、内部リークが相次いでいます。ここまで来たので、もう言ってもいいかなってということで、アメリカで内部リークが相次いでまして、一つは、

イギリスのザ・サンという大衆紙がありますけど、そこで出て来たのはアメリカの元情報将校が、実は2019年の10月から11月、12月と6~7回、軍の参謀本部でブリーフィングがあって、どうも中国の研究所から新しいウィルスが漏れたというようなブリーフィング…」

水島「ああ、話題になっていたんだ」

掛谷「はい。だから参謀本部は、もう知っていたと。まあ、ミリーなら確かに握り潰し兼ねないなと思いますけど、実はアメリカ軍が、もう、それを知っていたということが一つですね」

水島「うん」

掛谷「それから、つい先程、数時間前に、これはウォールストリート・ジャーナルです、これは大きいです」

水島「うん、うん」

掛谷「ウォールストリート・ジャーナルが、アメリカの情報機関の中で、FBIが一番、初めに研究所起源の可能性は、それなりのレベルで高く Moderate Confidence で、研究所起源だって言っていたんですけど、それを誰が言っていたかとか、或いは他の情報機関の中でも研究所起源と分析した人が実名を挙げて出て来て、こういう人は、もう、この時点で言っていたみたいなのが、だあ〜と出て来ました。

つまり情報機関の分析官とかも、研究所起源っていうことは、かなり早くに判っていたのに、とにかく、それがヘインズとか、要するにバイデン政権の閣僚に潰されていたということが次々判って来ていまして、この前もお話した通り、バイデン政権は、所謂、コロナ起源の機密文書も議会が機密解除するって決めたのに、ずうっと隠しているっていう、これは多分、トランプ政権になった瞬間に全部、出て来ると思うので、それで来年、多分、研究所起源は確定っていうことで、ようやく私の5年の戦いは終わるかなと。

石井さんはクルド問題で一人で戦っていらっしゃって本当に大変だと思うんですけど、私も起源問題は、国内では一人だったんですが、海外では沢山、仲間が居ました。ようやく一つの区切りがつくかなと思っています。

実は、そのあと国内で、この前、ちょっとお話ししたと思うんですけど、このあと日本分子生物学会に行きますって話をしたんですけど、分子生物学会で結構、色々な話がありまして、今、話題になっているあれですね、長崎大学のBSL-4のエボラの話です。その辺の関係者が危険な研究規定とか管理についてのシンポジウムをやって、全員、敵の中に、私が一人で乗り込みまして嫌がる質問を沢山しました。

その長崎大の方に私が質問したのは、スイス・チーズ理論ってご存じですかね。穴が開い

ているチーズでも沢山、並べれば塞がるって、だから、それで安全管理をするべきと言った時、長崎が一番、大事な最後の壁を造ってなくて、それは何かって言うと人が全然、居ない所に造ることですよ」

水島「うん」

掛谷「要するに、万が一、実験者が感染しても他の人に感染されない場所に造る。だから長崎だったら離島が沢山あるんだから、何故、そこに造らないんだと。それが最後の防衛じゃないかって言ったら、いや、非常用電源がって、非常用電源ぐらい別に原発でも何でもつくれますよね」

水島「うん」

掛谷「うん。だから全く言い訳にならない言い訳をしていました。そのあと、国立感染研の方が何人かいらっしゃって、以前、この番組でもご紹介しましたよね」

水島「うん」

掛谷「2020年1月の時点で、感染研は塩基配列を見た瞬間に、これは研究所起源だろうって騒然となったと。当然、彼らはプロだから解る訳ですよ。だけど緘口令が敷かれたと。ただ、まあ、それは一人だったので、別の研究者二人に、ちょっと聞いて、お宅の何々さんはそう言っていますけど、そういうことがあったんですかって聞いたら、それは事実だということで、まあ、裏もかなり取れてきましたので、つまり皆さんの税金で、研究している研究機関が国民に大事な情報を隠していたということですよ」

水島「うん」

掛谷「うん。実は研究所起源っていうか人工に見える特徴って、いくつかあるんですけど、その中に早めに知っていれば対処が出来たような治療なり、或いは、感染防止に役に立つ知識って、実は結構、あるんですよ」

水島「うん」

掛谷「だから、それを隠していたことって、本当に人を無残に見殺しにすることです」

水島「うん」

掛谷「それを国立感染研はやっていたっていうことですよ。これは物凄く大きい事だと思いますね。他にも、実は分子生物学会でも色々あったんですけども、実はロビーで歩いていたら、もう本当に多分、20代だと思いますけど、若い研究者の方に掛谷先生ですかって、声をかけられまして、ああ、はいつて言ったら、声を上げて下さって有難うございますと。私も塩基配列を見た瞬間におかしいと思ったんですけど。これは研究所起源じゃないかと思ったんですけど、誰も声を上げていないし、言えなかったんですけど、先生が声を上げて下さって本当に有難うございましたっていうように、要するにおかしいと思っている人は沢山、居たんですよ。

だけど日本では誰も声をあげられなかったということですね。前も話した通り海外では、おかしいっていう声を上げた学者、早期の2020年から声を上げた人は、実は沢山、居ました。勿論、彼らは、私と同じように叩かれましたよ」

水島「うん」

掛谷「だけど、それでも戦ったんですよ。やっぱり日本で戦える人が少ないっていうのは…、大変、おかしいと思っていた、何々と思っていたっていうことは勿論、気持ちは大事にしたいんですけど、やっぱり声を上げられなかったっていうことに関しては、日本人は、もうちょっと勇気を持たなきゃいけないんじゃないかなあと思います」

水島「そうですね」

掛谷「最後にファイザーの話を、あとで、ピー音で隠して戴きたいんですけど、今、明治製菓ファルマの問題が色々問題になっていますけど、やっぱり一番、問題なのは、私はファイザーじゃないかなあと思うんですね。というのは、日本の色んな被害者の中、今、色々被害者が出ていますが、それは殆どファイザーを打っていた人ですよ」

水島「うん」

掛谷「だから、やはり、その問題を追及しなきゃいけないと思っています。そこを遠慮すると、それこそ拝米タイムスになっちゃうんじゃないかなあと思いますので、アメリカでは、やっぱり、みんな、結構、頑張っています。要するに、情報公開請求とかでファイザーが色々隠した情報とかを今、開いて、それで追及するっていうことを、沢山、やっています。

あと、もう一つ、私自身は研究者なので、やっぱり自分達で調べるっていう、それが本当にリスクの有無というのは調べろではなくて、やっぱり自分達で調べるっていうことは、少なくとも科学者は出来るわけですよ。だから科学者の立場の人は、やっぱり自分で調べることをしなきゃいけないと思っています、その意味で言うと、実はファイザーで、みんなが無料で打っていた頃のワクチンなどを調べたくても、実は調べられなかったんです。

何故かと言うと、国が買い上げて国の持ち物なので勝手に分析をしてはいけなかったんです。なので、そういうやり方も拙いと思いますし、だから、そうであっても、研究者は、独立して On Going で調べられるような制度をつくらなきゃいけないと思っています。

一方で、今のレプリコンに関しては自由に買って調べることが出来ます。私は今の段階で、どんな実験をやっているとかいうことは未だ言えないんですけど、私の仲間が実際に、もう実験を色々やっています」

石井「ああ～、それは凄い事じゃないですか」

掛谷「はい。そうです。だから出来るんですよ。だから、私はウェットの実験が出来ないので、何人かの仲間です。私は基本的に塩基配列の解析と情報の分析しか出来ないんで、ウェットの実験が出来るような仲間が沢山、居ますので、そういうことをやっております。

やはり危険がある、危険があるって言うことも大事ですけど、どういう危険があるかを、ちゃんと調べるっていうことは、研究者ならやるべきだということで、やっぱり研究者の立場で声を上げている人は是非、実験、研究、或いはデータの解析っていうのを、やっぱり、自分で手を動かしてすべきだし、だから、勿論、メーカーとかは、そういうマテリアルを第三者に提供する、或いは、データを開示することです。

データの開示もですけど、当然、出て来た嘘を、私は基本的に生命学者とか製薬会社の言うことは基本的に信じていないので、だから物を載いて自分で分析するのが、一番、ハッキリするので、やっぱり物を公開して載くようにするっていうことを今後、特に製薬に関しては、やって載いて、それを、みんなが自由に分析できるっていうことが、今後の薬のリスクを低減させるっていうことに繋がると思っています」

水島「なるほどね」

掛谷「はい」

水島「これね、掛谷さんね、私は、そういうのは素人だけど、まず、今回のレプリコンに関しては、明治製菓ファルマが全データを公開すべきですよ」

掛谷「いや、あのデータは基本的に…」

水島「正しいかどうかは判らないけども、出しているんですか」

掛谷「基本的にデータは色々公開していますよ。ただ、問題になっているのは、こういう実験をしていないからしろというような話をしている方が居るんですね。だからデータに関しては製薬会社がやっている実験、基本的には治験とか論文にもなっていますし…」

水島「あ、ちょっと待って下さい」

掛谷「はい」

水島「これで凄く大事なものはね、治験しているんですか」

掛谷「していますよ、だからベトナムとか別に日本でもしています」

水島「ちょっと待って下さい」

原口「そのベトナムの治験がおかしいんですよ」

水島「いや、だから、そののところね、あのう…」

原口「今日は86人が死んだって言っていましたよ」

水島「だから…」

原口「だから掛谷先生がおっしゃる通り、彼らが出してきているデータには幾重にも嘘がある」

掛谷「だから、私も物を入手して実験をすると、それを嘘だということを証明する為には、同じように色々実験をするという事ですね」

水島「いや、ということはね、凄く大事な話なんだけど、まず、日本ではしていないっていうことですね」

掛谷「いや、日本でも何人かしているはずですから」

水島「え？」

掛谷「日本でも400人規模か何かで日本でもしています。はい」

水島「何人ぐらいしているんですか」

掛谷「400人か、ちょっと今、正確な数字が無いので、あとで…」

水島「治験というのはね」

掛谷「はい」

水島「別に責めている訳じゃないですよ」

掛谷「はい、はい」

水島「だけど治験というのはベトナムとか、全然、体制も違う、そういう国、アメリカは治験をやっているとか言っているでしょ」

掛谷「ああ、ヨーロッパが今、進んでいますね。ヨーロッパでそろそろ承認されそうになっていう話が最近ニュースで出てましたね、アメリカよりヨーロッパで先に輸入するって言ってましたね」

水島「そういうのを、ちゃんとやった上で明治ファルマ、或いは政府はね、それを出しているんですか」

掛谷「あのう、いや、やっていますよ。ただ…」

水島「やっているって、ちょっと、そこは…」

掛谷「それを言うと、一番、問題なのは…」

水島「凄く大事なものはね…」

掛谷「ファイザーのワクチンとかモデルナのワクチンは、日本人をやらずに、いきなり、日本人に打ちましたからね」

水島「うん。いや、だから、そこが問題になるんじゃないかと言っているのにね、今度は世界に先駆けて、明治ファルマのものを厚生労働省が承認したでしょ」

掛谷「はい」

水島「これは何かあったら凄い責任問題になる訳だと私は思っていて、今、おっしゃったように武漢から始まったというもの自体、沢山の方が犠牲になったりしている訳ですよ。我々も素人ですが、よく思い出すのは、ワクチン接種をやれば病気にならない、予防になるとというのが全く嘘だった」

掛谷「うん、その通りです」

水島「でも、これを現実に、もう事実が出ているじゃないですか」

掛谷「そうです。だから、それはファイザーのワクチンですね」

水島「うん、だから、それを…」

原口「水島社長ね、今朝も、これ、やったんですよ。そうしたら、実際に承認プロセスの人が中に入って来て、ベトナムのあれも検証した人が入って来て、何をやったかっていう

と、ファイザー、モデルナは緊急承認ですよ」

掛谷「うん、そうそう」

原口「ところが今度のレプリコンは通常承認です」

掛谷「そうですね」

原口「じゃあ、何故、通常承認なんだと。メッセージーRNAっていうところは変わらないだろうと。じゃあ、それで調べてみたら、一遍上人、つまり、あのう…」

掛谷「そうです、そうです」

原口「プロセスがね」

掛谷「そうそう、そう。そうです」

原口「そこだけです。だから掛谷先生がおっしゃるように、第三者が検証できるプロセスにしておかなきゃいけない。ところが、それがファイザー、モデルナ時代から契約によって中身も出しちゃいけないし、調べてもいけない」

掛谷「うんうん」

原口「それ、プラス、今回、マルチアンプリファイなんですよ」

掛谷「うん」

水島「いや、とんでもないじゃないですか」

原口「とんでもないですよ」

掛谷「一番、酷かったのは、やっぱりファイザーとモデルナの承認で、それは緊急承認だからなんですよ。それは緊急だからっていうことで、あらゆるものをすっ飛ばしてやって、だけどそれが実績をつくっちゃったので、そこからの変更ということで、そのあと、色んな変異株に対するものも、要するにJN1って今、もうパンデミックじゃないのに、今、打っているJN1タイプのワクチンとかは、別にレプリコンに限らず、普通のメッセージー・ワクチンとかも、今迄ほど丁寧に調べられないまま起きているので、これって、だから、別にレプリコンに限らず、実はメッセージー・ワクチンを全部に関して言えることですよ」

原口「そうそう、だから、僕も、それを何とか紛いのもんじゃないかって言って…」

掛谷「うんうん」

水島「うん、そうですね」

原口「世界じゃ、大体、もう何とか紛いになっているんです」

掛谷「うん、って言うか、ああ、そう。ただ生物兵器っていうこと…」

原口「リアルユースしている訳」

掛谷「はい」

水島「それと、もう一つね」

掛谷「はいはい」

水島「ちょっと、これ、もう一つね、素人っぽく聞きたいと思っているのは、何故、日本が今、その病気が蔓延して人が困っているとかいう状態じゃないのに、まあ、予防ということがあるのかも分かんないけども、何故、日本は自分で治験もやっていない、厚生労働省というのは結構、しぶとくて中々認可を出さないっていうのが有名だったのに今、これを行っているんだというのが素朴な疑問で、みんな、ヤバイじゃないのと思う訳でしょ」

掛谷「うん」

水島「実際にファイザーの悪い実績もある訳だから」

掛谷「うん」

水島「このことを踏まえてね、それで、掛谷さんが今、おっしゃっていたようにね、自分達で確かめることが出来る」と

掛谷「うん」

水島「つまり確かめることが出来るものなのに、未だされていない訳でしょ。それを確かめて貰ったあとでも認可するのはいいんじゃないですか」

掛谷「いや、えーと、私は法律の専門家じゃないので、あくまでも科学者として、今、色々言われている疑問を追試してみようとか、こういう実験をやっていないとか」

水島「ああ、そう。だから掛谷さんが科学者として、そういう実験をやりたいていうのは分かるけど、命に関わる問題だから」

掛谷「はい」

水島「だったら、私が普通の人間だったら、掛谷さんを信用しているから、ちゃんと実験して貰って、大丈夫って出たら考える」

掛谷「いや、勿論…」

水島「それが結論も出ていないのにね…」

原口「だから法律は水島社長がおっしゃっているようになっていて、それでちゃんと立証しなさいと。立証できないものは駄目ですよとになっていて」

水島「そうですよ」

原口「もう彼らの最後のラストリゾートって言うかな、感染予防効果も言えなくなったんです」

水島「うん、もう言わないですね」

原口「それで次は何かって言うと重症化予防効果で、この間、財金で質問があったから、じゃあ、重症化予防効果のデータを出せって言ったら、何と言ったと思います？」

掛谷「うん」

原口「海外では、この論文があります、この論文があると」

掛谷「はい。ええええ、ええ（笑）」

原口「いや僕が言っているのは、国内の検証をしろと法律に書いているんですね」

水島「そうですよ」

原口「国内の検証をしているはずだろうと。だったら重症化予防効果があるって宣言しているよなど。そのデータを持って来いと言ったら、最後まで持ってこなくて、質問の日の夜中にメールが来て、何が来たと思います？」

掛谷「うん」

原口「感染研の2022年のデータと、それから今、おっしゃった長崎大学のやつ」

掛谷「うん」

原口「長崎大学のやつは何かと言うと、そこに来た人で、死んだ人は来られませんからね」

水島「うん」

原口「来た人で肺炎とかになった人で、自分らがコントロール出来た人。これ、データじゃないですよ」

掛谷「うん」

原口「だから、もう完璧に崩れているんです」

水島「そうだよねえ」

吉野「それでね、厚労省は一応、レプリコンで第一種、第二種、第三層試験っていうのをやっているんですよ」

一同「うん、うん」

吉野「大分大学の医学部でやっていて、最初が2021年にやっていたんですよ」

水島「うん」

吉野「その時は42人で第二層試験は公開されていないですが、第三層試験が800人を超えているって言われているんですね。それで結局、そうですよ。発症予防効果っていうのは無くって、重症化予防効果っていうのがあるんだっていうことが答なので…」

水島「言っていますね」

吉野「重症化予防が95.3あるって書いてあるんですけど、だから、掛谷先生がおっしゃるように、それを検証しなきゃいけないですよ」

原口「検証出来ないんですよ」

吉野「だから出したデータがあるから、それで大急ぎで去年の9月に承認してしまったんですよ」

水島「うう～ん…」

吉野「出てから、みんな、それがレプリコンだったということを知ったんです」

水島「うん」

竹内「う～ん」

水島「なんとね…」

吉野「だから、もう明らかに認可ありきで動くようなルールでやっているの、水島社長がおっしゃる通りです」

水島「ですよねぇ」

吉野「それは、おかしいんですよ」

水島「うん」

吉野「昔は一つの注射が出来るのに、10年かかったんですよ。最終的にチンパンジーの実験までやって、5年ぐらい…」

水島「慎重すぎるっていうぐらいねぇ、噂があったので」

吉野「それが、日本人は、もうチンパンジー以下ですよ」

原口「掛谷先生、おっしゃるように金だって買い上げだったでしょ」

掛谷「(頷く)」

原口「それで、もう基金が切れているんですよ。だから切れていたらね、僕らが予算とか預かっている立場から言うと国庫に返さなきゃいけない。返さないで1本あたり3200円だったのが何故か平時に1万1千6百円になった。だから、この間、公取委員長を呼んで、何故、これは、こんな4倍にもなっているんですかと。みんな、平時の時のメッセージRNAなんかまで4倍になるのは、おかしいじゃないですか」

掛谷「はい」

原口「ファイザー、モデルナのね、それ、何故ですかって言ったら、公取の委員長がカルテルっていうのは、こういうもの、こうこう、こういう定義ですっていう答をされていました(失笑)」

水島「あんたが答える…評論家じゃないんだからね」

原口「ええ、それは定義を言わなきゃ、個別に言えませんからね」

水島「いやあ、なるほどね」

原口「うん」

水島「まあ、未だ残りの方もいらっしゃるの、まず、お話を伺いましょう。はい。では、石井さん、お願いします」

石井「どうも、石井です。私は二つありまして、僕は、大きな物語は話せないのですが、

今年は二つ、思い出がありました」

水島「はい」

石井「一つはチャンネル桜の視聴者の皆さんと水島社長に感謝したいのは、クルド人問題ですね。本を出すことが出来ました。まあ、売れているんですけども、これは、まあ、移民問題の失敗。移民では無いんですけども、実は掛谷先生とは前からお付き合いがありまして、頭の片隅にあったのが、悪い事が起きているのを証明をしよう」と

水島「うん」

石井「この情報を行政に投げて、まあ、行政は正に学会と一緒にですけども、掛谷先生の努力を知っていたので、それが頭の片隅にあったんです。成功した面と全然、動かない面があって、成功した面というのは、ようやく国会議員が動いてくれました。それは、正に掛谷先生の証明と一緒にですけども、客観的に見る事が出来る一方で、行政の仕組みが出来ているんですけど、全く動かない。もしかしたら、私、このワクチンの問題を全然、知らないんですけども、同じ機能不全が起きているのかなあという…」

水島「確かにそんな感じするねえ（失笑）」

石井「うん。仕組みはあります。やれと言っています。ところが何なんだ。現実は何なんだというのを繰り返し思いましたね。それで感謝を言うと、下手すれば、私は今、ここに居ないで、社会的に抹殺されていたかもしれません」

水島「ああ、ねえ」

石井「いや、国会議員が訴える、もう今でも、よく解らないんですけども、クルド人が民事訴訟で訴えて来るという不気味な行動をされました。その理由というのが、よく解らないんですけども、今、送検までされて、その国会議員は送検したって大騒ぎしている訳ですけども、何故、クルド人と戦わないで、僕を攻撃するのか全く理解できないんですが、それは、もう私怨は置いておいて、それを跳ね返せたのは、水島社長、チャンネル桜の視聴者の皆さん、世論だったんですよ。

まあ、ワクチン問題については色々な意見があるんですが、世論が物事を動かしていつて、それは非常に感銘を受けましたね。『草莽崛起』という僕の好きな言葉がありますけれども、草の根の人達が、みんな、おかしいと。日本の移民政策、外国人管理政策が全く生きていないっていうことを、ちゃんと解っていて突き上げてくれたことによって、僕は別に象徴でも偉い人間でもないですけども、一番、最初に怖がりながら一人で戦ったことを評価して戴いて生き残れたし、水島社長も呼んで下さったし、チャンネル桜の視聴者の方々に助けて戴いたっていうのは本当に感謝しています。

モーガンさんにも助けて戴きました。モーガンさんにも正に、有難うと声をかけて戴いて嬉しかったですね（笑）。それで、そういうのを見ると、ワクチンについては、僕、コメントできないんですけども、日本の健全な世論が色々な所であるなあというのと、申し訳ないけども、行政の機能不全っていうのが深刻なんじゃないかなあと思いました」

水島「そうですね」

石井「実は、もう一個、社会運動をやりまして、これは、あまり出来なかったんですけども、

ども、私はエネルギー記者だからエネルギー政策の正常化をやろうと色々騒いだんですよ。実はとんでもないことが起きていまして、科学的エビデンスが無いのに原子力発電所が一個、潰されたんですけれど、誰にも騒がれていないんですね」

水島「うん」

石井「原子炉に活断層という判断が行われて、今、原子炉が建設されるのは1兆円、かかりますし、こういう原子炉が1980年代に造っただけでも3千5百億円かかりました。そういう恐ろしい決定が行われているんですけど、政治とメディアは動かないんですよ。政治はビビっているし、メディアは原発嫌いの話が続いているから。

それで岸田政権下でGX政策が展開されました。経済政策。一応、柱になったんですけども総額150兆円。それと民間投資も含めて、国の投資が10年間で15兆円って言われているんですけども、恐ろしいことに話題にもなっていないんですね」

水島「う～ん、ああ、そうですね、私も知らないねえ」

石井「うん（笑）。笑っちゃうのは、岸田さんらしいんですけども、始めGXグリーン・トランスフォーメーションと言って、エネルギー政策、エネルギーの改革だって言ったんですけど、今、26業種になって、何故か半導体とか、潰れてしまった日の丸飛行機計画も、再び動き始めているんです（苦笑）。本当に機能不全が起きている。政治も劣化しているんですけど、実は行政が劣化しているんじゃないかなあと、僕は思いました。少数与党国会で政治決算が出来ないでしょうと。僕は金融記者でもあったんです。今年、見た中で驚いたのが、いきなり話が飛んでしましますが、日銀総裁が予告もしないで政策変更したんですよ」

水島「おお」

石井「そうすると株が吹っ飛んだんですね。いや、それ、普通、私が金融を見ていた10年前だったら3か月前から準備して、オペレーションして、オペレーションと記者会見で発言をこうやって推移させながら、状況を見て政策変更するんです。学者出身だから、いきなりやってしまった」

水島「うん」

石井「それで日銀の当局は青くなって翌日、記者会見をしたんですね。馬鹿じゃないのって思うんですが、ここで言った敦賀2号機。実は原子力発電所って最大4千人も雇用出来るんですよ。そうしたのに、いきなり廃炉決定して、恐ろしいことに記者会見もしてない訳ですね。

それで岸田首相もコメントを求められたけど、一言もコメントしなかったんです。GX政策をやるっていうのに。実は、財政には色々な意見があると思うんですけども、僕が驚いたのは、僕は90年代から2000年代まで金融記者だったんですけども、財務省がボコボコにされているんですね。それは室伏さんが言っていたように、確かに財務省はおかしいところがあるんですけども、財務省は以前、非常に丁寧に説明していたんですよ。

メディアに記者の代表を派遣していましたが、それを、どうも減らしている。数が減っていると、僕は聞いています。つまり、あらゆる局面で日本の行政が、かなり丁寧さが下手

になっているような印象を受けています。それで、もっと細かいことを言うと、クルド人問題が全く動かないのは、入管がパンクしているからですね。あと警察が動かない。ビビっているからですね。

実は、あまり言っちゃいけないんですけど、埼玉県警の内部からメールが2～3通、来まして、貴方の言う通りであると。本当に上は守ってくれないから、みんな、逃げているんだってというのが現状だって言っていました。これは話を纏めると、この2点の差ですね。クルド人問題は半分だけ、ああ、三分の一ぐらいかな、私の意図通りに動いてくれたけれど、もうひとつのエネルギー政策は全く動かなかった。

これを見ると、日本の世論の健全さと霞が関の劣化っていうのは今、同時進行しているというのが今年、ふと思ったことであります。まあ、この話がきっかけになればいいんですけどもね。どうも有難うございます。改めて感謝を言うと、視聴者の方々が声を上げて下さったことが、私の社会生活も助けてくれたんですけども（苦笑）、このクルド人問題は外国人移民問題が動いたきっかけになったと思うので、その健全な世論の兆しを守り、頑張っって大きくしていきたいし、今、埼玉市民の声が悪化を止めたような感じ。未だ改善はしていないんですけども、そういう希望を期待したいなあと思う1年でした。有難うございます」

水島「はい。まあね、新藤義孝さんとかね…」

石井「ただ言っただけじゃあ、無理ですね」

水島「そう、だから…」

石井「形にしないと。というのが私の期待です」

水島「あの和田政宗君とかね」

石井「うん。和田政宗さんは論外ですけども」

一同「(笑)」

水島「凄いねえ、あいつも確信犯っていうかねえ。うん」

石井「うん。だから怖いのはね、申し訳ないですけど、僕は売国っていう言葉を、あまり使いたくないですけど、不法移民を支援する人達が与野党に居るんですよ。これはアメリカじゃ無いですよ。モーガンさんに言うとですね」

水島「そうですね」

石井「未だ真面だと思えます。ちょっと不気味な動きが見えて、今、その不気味な動きした人達は狡い事で全員逃げちゃったんですけども、だからワクチンも、そうかもしれませんが、おかしさは白日の下に晒すことで、変わって来ることを期待したいなあと思えます。有難うございます」

水島「あれだよねえ、何か陰で、本当は廃棄物の業者になっているとかね」

石井「僕の話はミクロ過ぎて申し訳ないんですけども、クルド人問題については、そういうおかしいことが積み重なっている感じがしますね」

水島「そうですね。そういう意味で言うと、クルド人の問題をきちっとやるっていうのは凄く大事な事だと思いますね」

石井「うん」

水島「同様に同じようなことをやるようになるし、そうなってくるしね」

石井「多分、これは劣化の象徴ですけど、多分、僕は、ワクチンについては分かりませんが、同じことがあちこちで起き始めているんじゃないかなあと」

水島「あると思いますね」

石井「行政の人、頑張って下さいなんですけれども、仕組みを作らないとなっているのが、本当に国民に委ねられた、あのう…」

水島「行政は今、本当に頑張らないんだよ」

石井「はい」

水島「まあ、事なかれ主義の人がね…。これは未だ出ていなかったけど、日本医師会っていうのは、やっぱり相当、問題だと思うね」

石井「うん」

水島「こいつらが、つまり医療というのは仁術の問題もあるじゃないですか」

石井「はい」

水島「人の健康や命を守るという最低限の倫理とか道徳が全く無くて、もう金儲けの機関になっている」

石井「うん」

水島「利権集団の機関になっているんじゃないかっていうね。医師会という巨大な組織だろうし、武見さんがね、そういう意味で向こうのWHOと日本の医師会を、しっかり繋げてくれたっていうかね」

石井「うん（笑）」

水島「皮肉で言っていますから間違えないで下さいね（笑）」

一同「（笑）」

水島「はい」

石井「そういう皮肉も判んない（笑）」

水島「はい、ということも含めてね、日本のそういった意味での構造が、よく見え、今回のあのパンデミックのことも、今言ったクルド人問題も、日本の中の矛盾が非常に、よく表れていることだと思いますけどねえ」

石井「ああ、ちょっと、たまたま日曜日に散歩していたら、緒方洪庵の墓があったんですけど、未だに綺麗な墓が備えられていてですね」

水島「う～ん」

石井「やっぱり綺麗な志を持っている医療の方とか、そういう方々はちゃんといらっしやると思っているんですね」

水島「それは居ると信じているしね。居て欲しいと思いますけど」

石井「お墓で日本の倫理を語ってもいけないんですけども、だから、そういう人達、クルド人問題で、僕が確認できた真面目な市民の健全さっていうのは未だ残っているの、徳俵一個だと思っんですけども、それについて事実を明らかに、事実に基づいて事実を語り掛けることによって変わっていく希望が今年は持てたかなあと。本音を言うと、お金にも得にもならないし、脅されているので、来年はクルド人問題から逃げたいんですけども」

一同「(笑)」

石井「どうも逃げられない状況なので埼玉県民の皆さん、ごめんなさい。ということで、ちょっとローカルな話でした」

水島「はい、竹内さん、どうぞ」

竹内「是非、聞きたいことがあるんですけど、先程、チャンネル桜の視聴者の方々の世論が、石井さんの被っている問題をひっくり返してくれて、助けて貰ったというお話をされていましたが」

石井「はい、そうだと思います」

竹内「ちょっと、具体的に、どういう…」

石井「だから既存メディアが動かなかったんですよ」

竹内「はい」

石井「それで、私を中傷するクルド人の報道、訴訟とか、あと変な人達、不気味な人達が、日本語でずっと喚き続けたんですね。こいつの言っている事は嘘だとかですね」

竹内「それはSNSですか」

石井「SNS、Xですね」

竹内「はい」

石井「ずっと絡み続けて、私が寄稿したら、そのメディアに暴言を吐くとか」

竹内「はい。ええ、ええ」

石井「クレーム攻勢をかけるとか、どうもクルド人が最近、お金を稼ぎ始めているので、それに絡んだ不気味な人達が居たんですね。またローカルな話で申し訳ないんですけど、下手すれば、そういう人達に多分、消されていったと思うんですよ」

竹内「はい」

石井「だからチャンネル桜に出して戴きましたら、その圧力の中で本も出せたし、あと、

応援する声も一定数、あったんですね。お金の話をすると生々しいんですけど、和田政宗とクルド人と、クルド人の訴訟によって、まあ、出せないことはないんですけども、何百万か負担せざるを得なくなりました。未だ進行中です。申し訳ないですけども国会議員は税金ですよ。クルド人が儲けているのは違法解体ですよ。それで私は自腹を切って何回も通っている中で、助けて下さいって言ったら、本当に、その3つぐらいの訴訟分と負けても大丈夫なぐらいのお金は集まったんですよ。それも3千円とか500円とか、そんなレベルの人達の草の根のお金が、私を助けてくれたんですね」

竹内「ああ、そういう意味で」

石井「普通だったら潰されていますよ」

竹内「ああ、解りました」

石井「はっきり言うと和田正宗なんて税金ですから。でも、どうせ勝ちますけれどもね。そういう草の根の健全さですよ。和田政宗なんて今、大炎上していて誰にも相手にされていないんですけども、みんなが私の方が正しいって解ってくれている訳ですよ。

クルド人についても沈黙していて、笑っちゃうのは、さすが朝日新聞だと思うんですけども、私が朝日新聞の取材の裏側とかを全部、ばらしたら、この6か月間、朝日新聞は、クルド人問題をひとつも報道しなくなったんですね（笑）。それは世論の圧力で、世の中が変わっているのと、あと壮大な話をしている中で全くローカルな話で申し訳ありませんが埼玉県越谷市議会で、クルド人問題が起きているって言った市議に対して、申し訳ないですけど、立憲民主党と共産党が共同決議で懲罰動議を出そうとしたんです。恐ろしいことですけど」

水島「ああ」

石井「どうせ負けるにも拘らず、それを出したってということは、私の訴訟と一緒に、威嚇しようとしていたんでしょう」

水島「うん」

石井「ところが、私が全部、そのまま、その事実を、ばあっと出したら、それは、ネット炎上だって、からかわれるかもしれないですけど、大炎上しまして、その決議が止まった訳ですね」

竹内「うん」

石井「だから、そうやって市民の怒りと言って、市民がネットワークを作り始めているんです。SNSで私や埼玉県議を軸にして、それは僕も表に出していませんけど。私が本を書けるぐらいの材料がドバって集まったのは、正に市民のネットワークと声だったんですね。そういった人達は記事毎に支援してくれたり、だから、もしかしたら、例えば、ワクチンと言うと大きい力があるのかもしれませんが。僕は分からないですけど。そうやって、その積み重ねですよ」

水島「そうですね」

石井「だから、その健全さっていうのは日本に充分、あって」

竹内「うん」

石井「感動したのは、埼玉にはヘイトとか外人差別がひとつも無いんですよ。みんな、真面目に、そういうのはいけないけれども、自分達の生活を守るために立ち上がっている訳ですね。自分の自慢になっちゃいますけど、そのお金をくれた方が数千円ですけど、心に残ったメッセージがあって、石井さんがおかしいって言うまで、おかしいって声を上げられなかったと。自慢じゃないですけど、あちこちで色んな媒体を使って、おかしい、おかしい、埼玉県民の人権を守るってということで、私は声を上げていい事が解りましたと。

日本の場合は、さっきの掛谷先生の委縮かもしれないですけども、私は小さい頃から、外国人と仲良くと摺り込まれてきましたと。それで性犯罪の被害を受けたって言ったら、恐ろしい事で、クルド人周りで攻撃する奴らが居るんですね。名前を出すぞとか、お前、本当かと詰めて来たり、そういう変な奴で、そいつを調べたら娘がクルド人に勤めていて、クルド人で儲けている一族だったんですけども、だから、そういう人達は怖かったけれども、石井さんが袋叩きになってもギャーギャー喚いてくれて、おかしいと言ってもいい事が分かりましたと言われたんです。ああ、それは、そうだよなあって思って…」

水島「いや、本当にねえ、私がいつも言うんだけどゼロと1は違うっていうね、石井さんは、その1を始めた。ゼロはいくら100万回かけてもゼロだけでも1を始めれば100人、200人、どんどんと。だって、実際、ここに居る皆さんは殆どゼロから1をやっている皆さんですけども」

石井「あ、そうですね。はい。おっしゃる通りです」

水島「そういう意味ではね、これから、また来年もクルド問題を…」

石井「ああ、もう、逃げたいんですけども」

一同「(笑)」

石井「申し訳ないんですけど」

原口「川口で決議案を出した市議を、愛知で公認したんですよ」

水島「はい」

原口「それは立憲の会議に受かっている議員で、これを公認した大串っていうのが今、僕の佐賀二区の選対委員長ですよ。大串は、その人達からレイシストって言われています」

一同「(苦笑)」

原口「その川口の市議を公認したから」

水島「ああ」

竹内「ああ」

原口「まあ、そういうこともあるんですよ。石井さんがおっしゃったことで、一個、大切なのは、例の8月5日の植田ショックね。あれは国会でも全く検証していないんですよ」

水島「なるほどねえ」

原口「この間、財務金融委員会の日と、日銀の政策決定が被ったから日銀が来なかったんですよ。でも来られないんですよ。でも、あれは酷い」

水島「そうだよな」

原口「もう本当にアメリカだとブラックアウト期間があつて、その間の情報っていうのは流れないんだけど、あれで、もう、あの8月5日のあとで、どれだけ日本の企業が食われて壊れたか」

水島「ねえ」

原口「それが全く未だ検証されていないんですよ」

水島「今ね、もう一つ言うと、全体的にどの分野でも、その劣化と言うかね、知的と言うか、道徳的にも見識とか知的にも劣化しているっていうね。それから無責任になっているというねえ。ちょっと怖いぐらいですけどね」

石井「そうですね」

水島「はい。有難うございます」

石井「すみません、余計なことを申し上げて」

水島「では、原口さんは、もう直き出なきゃいけないので…」

原口「いや、ジェyson先生や室伏先生の話も聞いてから行かせて下さい」

水島「ああ、そうですか。じゃあ、室伏さん、宜しくお願いします」

室伏「はい。すみません、全体と毛色が違う話と言うか、あと「今年の総括 Part 1」の方でも恐らく話した話になってしまうんですけど、今年の総括ということで、やっぱり言えば、今年は世界的な選挙イヤーだったと」

水島「うん」

室伏「これは私のオンライン・サロンでも年初にその話をして、まあ、どうなるかっていう話をしたんですけど、結論から言うと、世界的な転換が始まったということなんだろうなあと。具体的に言うと、どういう転換かって言うと、グローバリズムから国民主義へとか、新自由主義から責任ある政府へという、恐らく、こういう流れなんだろうなと。

まあ、これは確定した訳じゃなくて転換が始まっているっていうことですね。象徴的な話で言えば、例えばフランスで国民連合が負けたという報道を日本のメディアが盛んにしているんですけど、議席数は物凄く増えました」

水島「うん」

室伏「ですから単独の政党としての議席数という意味では、国民連合が第一党ですよ。このことを言わないでしょ、不都合な真実ですから。ええ。実際、そうですね。ドイツでは、そのドイツの為の選択肢が伸びています。それから他の国でも、彼らは、所謂、『極右』と言いたがるんですけど、国民主義政党が政権を取るとか躍進をしているという状況。

つまりヨーロッパの場合はEUグローバリズムですけども、もう、いい加減にしろという話で始まっているんだってことです。アメリカは、正にそうですね。トランプ政権。トランプ政権が、そのトランプ次期大統領のWHOからの脱退の話が先程、出たんですけど、恐らくそういう話でしょうけど、私のような国際政治とかをやっていた人間の立場からすると、これは、やっぱり単純に言うとならなくて、結局、第二次世界大戦の戦勝国体制、国連体制の一角じゃないですか。

この体制が完全に綻び始めた。崩壊し始めた。そのことの象徴なんだろうなと。だから、正に創って、これで色々やろうと考えたのはアメリカな訳じゃないですか」

水島「うん」

室伏「それが、もういいと。そういう大統領をアメリカ人が支持して、元々アメリカが、国連に分担金、払わないとか、そういうことはありますけど、だから正に、その体制が、壊れて来た、そういう風な事の始まりなんだろうなっていうことがあると思いますと。

ただ一方で、日本に目を転じてみると、もう国際機構信仰とか凄いじゃないですか。国際機関が言っていることは正しいんだとか、国際機関が言っている事は国連の決議なんだとかってね、あそこは、ただの主権国家同士の、まあ、ある意味、パワーポリティックスの現場だっていう風な見方をする人が、あまりにも居なくて、私の周りでも何かね、平和、平和っていう人間が、国連が、国連がって言うんですよ。だから、いくら、そういう話をしても中々解って貰えないんですけど…」

室伏「ええ」

室伏「私なんかも元々、私の大学なんか、ほんとウィルソニアンだね、アイディアリズムの巣窟みたいな所だったので、私もそういう考えで入っていましたが、やっぱり知れば知る程、リアリズムっていうことが解って来るので、僕は、大学の4年間で完全にリアリズムに転換して、私の卒論の指導教授からは、揶揄される言葉として国策論者という風になられて、私は当たり前だという風に思ったんですけど、ただ、やっぱり未だね、日本は、こういう変化っていうものが判らない。これに関しては、物凄い危機感を覚える今年だったということですね。

あとは中東に関して言えば、中東は正に象徴という風な意味で申し上げますけども、イスラエルが、そのう、こういう話はしてもいいんですよ」

水島「うん、勿論」

室伏「完全に侵略戦争をします。シリアのアサド政権が崩壊して、そうしたら真っ先に、シリアを狙い始めましたよね」

水島「うん」

室伏「今、因みにシリアの政府って未だ政府の国家承継されていないので、国際法上の位置は交戦団体という非常に宙ぶらりんな状況ですけども、それをいいことにして、シリアにも触手を伸ばせようとした。ガザでは連日、ジェノサイドをやっている訳ですよ。これに対して国際司法裁判所の判決であるとか、それもあつたけどもイスラエルは完全に無視しているじゃないですか」

一同「うん」

室伏「これが国際政治の現実なんだよっていう風なことを分かんないといけないんですけど、それは、もう一回、日本に当て嵌めて考えると誰も守ってくれないんだよと」

水島「うん」

室伏「同盟国っていうのは別に友人でも何でもなし、いつ裏切るか判らないと」

水島「うん」

室伏「だから僕は日本のこの言葉で、もう本当にやめてくれと思うのは、同志国というね、同じ志だからいいんだって言うんですけど、そんな学生運動じゃないんだから…」

一同「(笑)」

室伏「学生運動だって内ゲバで最後、裏切るんだから、何か、それで大丈夫だとかね、そこからだったら何か食糧とか物資を分けてくれるとかね、そういう何か砂糖漬けのシロップ漬けみたいなのは、もう、やめてくれよ、そういうのと。それも、やっぱりね、今年は、もう転換できないどころか、未だ更に砂糖を増してかけているような状況ですから、来年は転換しなきゃいけない。

それを年末から、この言論で口を酸っぱく言うという意味に於いて、やらなきゃいけないなあというふうなことがありますね。日本に於いては、原口先生がいらっしゃる前ですけども、まず一つは高市早苗という総裁が誕生するチャンスを、どうも色々聞いていると、ネオコンとか中国が介入して潰したという風な残念なことになって、無能な総理がボケえ〜と座っているだけと」

一同「(失笑)」

室伏「あと衆院選の結果から言えるのは、やはり民意は減税とか積極財政を求めている訳ですよ。ところが今、それを、これね、丁度、さっき、僕、ブログ、ダイヤモンド・オンラインに載せたら、Pay Viewが見込めないという、いつもの理由で拒否、掲載拒否されたので、僕、自分のブログに書いて、更に、それは何人かの国会議員とかに、わあっと撒いたので、多分、今頃、読まれていると思う。ざまあみろと思うんですけど(苦笑)。

結局、そういう風なことがあるにも拘らず、ここで必ず財務省が悪いって話が出るんですけど、確かに財務省っていうのはマクロ経済が全然、解らないし、税の役割とか、お金が何かに関しても完全に誤解をしている人ばかりです。いや、解っている人間も居ることは居るんです。主流派はそっちになっているんだけども、財務省が何を言おうと政治家がちゃんと理解をして政治家がお勉強をして、お前、ふざけるな、この野郎バチってやることは出来るんですけど、それすら出来ないし、そもそも勉強していない。

無理解で、今の状況で自分にとって何が有利かっていう風な政治家が増えちゃったと。で、そうするとね、例えば原口先生みたいな方っていうのは何か異端児扱いされてということになる訳じゃないですか。だから、この状況をね、まあ、やっぱり何とかしなきゃいけないんだけど、正に民意は正しい方向性を求めているんだから、やっぱり、これからは政治家に転換して貰わなくちゃいけないし、有権者の皆さんには来年も参議院選がありますから、そういう政治家を選ぶように意識を変えて戴くという転換にもしなきゃいけない

い。

ただ少なくとも民意は、もう転換を始めていると。そういう1年なんだろうなっていう風に思っております。じゃあ、原口先生もお時間が無いようですし、僕は未だ、このあと、色々と言おうと思っていることがあるんですが、この辺で一旦、留めておきます。まず、私が冒頭で今年を総括すると、そんな感じかなあと思っています」

水島「そうですね。昨日、伊藤貫さんと特番で対談したんだけど、ちょっと面白かったのは、我々が考えている以上にアメリカも中国もこんな奴はどうでもいいと、ちょっと脅かすとか、煽てりゃあ、直ぐ調子に乗って、のぼせ上がるだけで、とにかく金を奪ってやるだけでいいという感覚を、実は日本に対して持っているっていうことを知るべきだと。

我々は石破内閣の対応はどうだとか色々なことを言っているけれども、日本の状況、先程、何方かが言ってくれたけど、もう個人GDPが22位になっているっていうね、韓国にも台湾にも追い抜かれているっていうね、この30年間、殆ど下がりっぱなしとかいうものを見た時、それから主権意識も無いし、我々がアジアの中で平和を作っていこうとか、そういう意識も全く無い。伊藤さんのキツイ言い方ですけど『戦後の日本人は世界で一番、臆病で卑怯な国民になり果ててしまっている』、そういう現実を見て、ネオコンのバイデンも中国の習近平も知っているんだと。

そういう状態で適当に転がされていることがね、自覚できない程、駄目になっているっていうことを、私達は理解しようじゃないかというのが意見の一致したことですけどね。

だから、今、おっしゃったように、その現状分析と一致する訳ですよ。あの石破さんの在り方ということも含めて、また、あとで、色々伺いたいと思います」

室伏「はい」

水島「モーガンさん、お待たせしました。宜しくお願いします」

モーガン「はい。宜しくお願い致します。今日はスカイプで失礼致します。実は今、論文と格闘中でスタジオまで行けなかったんですが、その論文の内容は、この間、吉野先生のYouTubeに出させて載いて、その場で優生学と非白人に対するジェノサイド、アメリカの歴史とかについて、日本国内でもアメリカが同じようなことをやって、その内容について、論文を書かせて載いて、今日は研究室から失礼致します。それで今年はどういう1年だったかと振り返って考えると、やっぱり今年の漢字で表せば『桜』だと思います。

今年チャンネル桜の1年だったと思います。色んな先生方のお話を拝聴して、私も肌で同じ現象を感じています。というのは、国民は段々日本人になりつつあると思います。段々覚醒していると思います。自分達はアメリカ人でもないし、他の国の人間でもないし、世界の人間でもないし、日本人ですと。その意識が日々に強くなっていると思います。

一方、自称エリート、まあ、永田町の奴らとかは日々にアメリカ化していると思います。日々に、もっともっとアメリカの為に、この国を売りたいという、その願望が強くなっていると思って、そのギャップが日々に大きくなって広がっていると思います。そのギャップを意識しているということは、もう日本人だと意識しているっていう事も、チャンネル桜のお陰だと思います。私は何回も何回も、そのスタジオに行かせて載いて、本当に勉強させて貰っているという感じが強いので、今年の漢字は『桜』だと思います。

勢いが全てこっち側だと感じます。今年2024年という1年は、自民党が死にかけた1年で、拝米体制が死にかけたという1年で、最新の月刊拝米を見ると、同じ意味の詐欺師が、また出揃っています。自民党の犯罪者が揃っているし、自民党を推し、推ししている普通の拝米保守が揃っているし、言っているのは、最新の月刊WILLですけれども、高市早苗が自民党を立て直したいという風に言っていて、あの連中は、これから新しい来年に入っても、もっともっと力を失う、その勢いが変わらないと思います」

水島「うん」

モーガン「私の方から最後に一点ですけれども、色んな先生方が、おっしゃったんですが、チャンネル桜の視聴者、私もチャンネル桜の視聴者っていうよりも、一般国民の健全さ、石井先生が、さっき、おっしゃった健全さを、私も、この1年、何回も感じています。

例えば靖国神社でも、皆さんとご一緒に参拝させて戴いて、その時に色んな人々に出会って、善い人がいっぱい居るなあと思いました。何故か永田町には居ないんですけれども、一般国民の方々に出会う度に、私はいいなあと思って、色んな方々が資料とか本とか雑誌とかを送って下さっています。私の方からのお礼が遅れていて本当に申し訳ないと思って居ますけど、他の方々に見えていない形で、チャンネル桜の視聴者に私が支えられています。私は来年に入っても引き続き、このチャンネル桜と共に闘いたいと思います。まず、私の方からは以上です」

水島「はい。有難うございます。今日は、それぞれの皆さんのお立場から、今年の在り方を言って戴きましたけど、原口さんは、どうしても退席しなきゃいけないので、最後に、ちょっと一言、お願いします」

原口「はい。この1年は本当に水島社長に始まり水島社長に終わりました」

水島「いや、私、そんなに（笑）」

原口「いや、本当にそうで、あの真夏の時も、それから寒い時も、最初に皆さんをお迎えになって、それで最後まで見送られていた後ろ姿を、僕はずっと見てきました。もう本当に、ここにいらっしゃる皆さん、掛谷先生、さっきはすみませんでした。ちょっと誤解していました。やっぱり戦えば勝利は来るんだということをつくづく思います。ジェイソン先生、また来年も宜しくお願いします。皆さん、有難うございました」

水島「はい」

原口「失礼します」

水島「ということで、丁度、時間が真ん中なので5～6分、コマーシャル・タイムで次の後半までお休みします」

一同「（礼）」

<後半>

水島「後半になりました。今年の総括という形で、それぞれのお立場からご意見を伺いましたけど、後半になって、そんな時間もある訳じゃない、あと1時間半ぐらいなので、来

年から一体、何が起こるんだろう、色んなことがあると思います。取り敢えず、我々が、一番、注目しているのはトランプ大統領、そして、これは私の解釈かも知りませんが、アジア、韓国でもきな臭いことが色々起きている。通告が無かったとか誤魔化しているけど、アメリカ軍があれを知らない訳がないですね。

それからイスラエルの問題、今、ジェノサイドをやっているイスラエル軍の戦いもモサドはハマスが攻めることを知らなかったって、そんな千年も攻めることを知らない訳が無いっていうね。こういったようなことを、一種の情報戦というか色んなものフェイクニュースとかを織り交ぜてやってきた。この状態が明らかになる、本当のことを知る人達が段々増えて来たということですけども、では、皆さんから見ると、一応、世界ナンバーワンの国の大統領にトランプが復帰する。

彼は一体、どういうことをやるのか。或いは、どういう人間なんだろうということも知らななきゃいけない、考えなきゃいけないことだと思います。評価する方、しない方、色々だと思いますけど、今回は、先程、ジェysonさんが最後になりましたけど、モーガンさん」

モーガン「はい」

水島「これからのことですけども、モーガンさん、私はチラッと聞いているんですけど、来年、トランプがアメリカの大統領に就任することについて、改めてどうなるか、まあ、それまでに暗殺の危険もあるとか、ずっと言われていますけど、どうですか」

モーガン「やはり、一番、気になっている問題ですけども、移民問題です」

水島「はい」

モーガン「この間、チャンネル桜の大学でも講演させて戴いたんですけども、人身売買というのは大人だけではなくて、もう子供も…」

水島「そうですね」

モーガン「かなり売られているって非常に闇なところがあって、それが大きなビジネスになっています。それで、もしトランプがそれをやめさせようとするれば、自分の身が危ないのは当然です」

水島「うん」

モーガン「その人身売買を是非、やめさせて貰いたいというのが、私の一番、大きな希望ですが、もしトランプが、そのビジネスをやめさせようとするれば、自分の身が危ないだけではなくて、内戦が起こる事が非常にあり得るんじゃないかと思います。というのは例えばカリフォルニアの知事、ギャビン・ニューサム（Gavin Newsom）という人ですけども、そのギャビン・ニューサムは大統領になりたいし、その野望があるし、本人は強制送還するという措置を絶対に許せないっていう風に言っています」

水島「はい、そうですね」

モーガン「ということは、もしトランプがそのような抵抗を乗り越えようとするれば軍隊、又は州兵を使うという手段はあるんですけども、考えられるパターンとしてはカリフォルニア州の知事として、その州の州兵を派遣することが出来ます」

水島「うん」

モーガン「大統領 VS 知事っていう、とんでもない、1861年みたいなパターンになってしまって、又は国内ではその知事だけではなくて色々な人身売買の利得者が居て、トランプがその連中を潰そうとすれば、逆に連中が表面化する、可視化する、誰が今迄、その嫌なことを持って儲かった。そのことが明らかになると思っています。

まあ、2千万人以上が勝手に国に入って来ていると言われていて、みんなを集めて何処に行かせるかって言うと、それは多分、メキシコでしょう」

水島「うん」

モーガン「メキシコも反発するし、メキシコの北部をコントロールしている麻薬ギャングも反発するし、もうメチャクチャになってしまう可能性が大と私は思います」

水島「そうですね」

モーガン「ある意味では仕方がないし、やって欲しいし、でも最近では、マイク・ジョンソンという残念ながら同じルイジアナ州の人間で、別に、まあ、典型的なルイジアナの政治家で腐敗しています。アメリカ合衆国下院議長で、トランプ派が望んでいる予算、まあ、それをいじって、民主党に跪いてっていうことは、いくらトランプがやりたいと思っても、共和党は、あまり信頼できない奴らが多過ぎて、そもそも制限もあると思いますし、限界もあると。トランプの、これからやりたい目標だって、全部、出来るはずでもないですが、日本にとっては先程、水島さんがおっしゃったことですが、あの共和党は、いくら、アメリカを良くしたいと言っていると言われても、日本が好きだとか同盟国だから日本を守りたいとか、そのような人はほぼ居ない訳ですよ」

水島「そうですね」

モーガン「ほぼゼロです。逆にトランプは多分、日本の事を、あまり好きじゃないと思いますよ。その日本スチールの買収問題が1年以上前ですかね、初めてニュースになったら、あれは第二次世界大戦の敵国、敵の国だったじゃないかと、そのような即時的に感情的な発言をして、それは本音じゃないかと思っ、本当は、この国を守ってくれているのは、自衛隊以外は誰も居ないんです」

水島「全くそうですね」

モーガン「あの米は信頼にはならないし、この2025年は米の国内がメチャクチャになるかもしれないので、もう今以上にメチャクチャになる可能性があるんですが、日本は、今がチャンスだと思っ、みんなは多分、同じようなことをおっしゃると思いますけど、今がチャンスで、例えば出来ることとしては、あの国連、あの戦勝国のお祝いクラブ」

水島「うん」

モーガン「あの国連は最近、皇室に対して天皇陛下に対して非常に失礼な口を出したじゃないですか」

水島「うん。あれは、どんどんエスカレートしていますね。はい」

モーガン「ねえ、男女平等云々とかそのような余計なアドバイスをしてくれて、国連まで

行って抗議している方々もいらっしゃると思いますが、それは良い事です、2024年を調べたら2億5千万ドル以上、日本国の国民の血税を国連に寄付していると言われてます。それをゼロにすればいいと思います。私が考えるのは国連に抗議するんじゃなくて国連を潰す訳」

水島「うん」

モーガン「そのようなことは日本だけでは出来る訳ではないですけど、こうやって永遠に日本が丁寧に交渉しているとか、お願いしますとか、この間、あの岩屋が中国の王毅と会ってブイの撤回をお願いします、ご検討くださいみたいな感じで（失笑）」

水島「ねえ、うん」

モーガン「もう永遠に、日本がご丁寧に交渉するのではなくて2025年は、日本が、また武士になればどうかと考えています」

水島「うん」

モーガン「アメリカは、もう頼りにはならないので、日本は早く独りだと覚悟して、その新しい新年に期待したいと思います」

水島「うん、そうですね。まあ、一番、確かなのはアメリカが頼りにならないし、逆に利用されるだけっていうね。トランプになると、今、我々にとってチャンスかも分からないけれども、実は物凄く厳しい態度を執る可能性がある」

モーガン「そうなんですよ」

水島「うん」

モーガン「あのう、グラス大使、ジョージ・グラス（George Edward Glass）っていう人が大使に任命されたと思いますけど」

水島「ああ、そうですね」

モーガン「この人は、ただ中国に対して厳しい態勢を執るって、まあ、それは態度を執るのはいいですが、だからと言って日本を守るっていうのはそうでもないと思います」

水島「うん」

モーガン「何も変わらないと言うよりも、新しいトランプ政権になってもエマニュエルがつくった構造を引き続き、然程、変わらないかもしれませんね」

水島「そうですね。私はエマニュエル大使を『総督』って呼んで来たんだけど、エマニュエルが日本の政治家を見切ってLGBTとか夫婦別姓の話もね、どんどん進めて来たっていうのを見ると、やり方は、こうやれば日本人は言うことを聞くんだっていうのをね、ちゃんと教えちゃったみたいだね、そういうことで同じことを、もっと強烈にやるかも分かんないという感じですねえ」

モーガン「はい」

水島「なるほどね、それはその通りですね。はい。分かりました。このアメリカの新しい大統領はそういう感じになるだろうっていうんですけども、室伏さん」

室伏「はい」

水島「順番にこっちへいきたいと思います。室伏さんは、どうですか」

室伏「来年から起こる事って言うと、まず一つは、私の立場で言うとおきますと、昨日の経済財政諮問会議で来年の、かなり楽観的なデータを出しているんですよ。来年は賃金の上昇が物価の上昇を上回るだろうとかね」

水島「うん」

室伏「GDPもね」

水島「それは誰が、ですか」

室伏「内閣府の経済財政諮問会議です」

水島「ああ、諮問会議ね。はい」

室伏「一応、試算という形です」

水島「ああ、解りました。おお、脳天気だね」

室伏「何なんだろう、この人達はと僕は思ったんですけど」

水島「(笑)」

室伏「まあ、その通りにはならないのは判っているから、それから数字上、見かけ上、そういうふうな数字をつくるか、どっちかなんでしょうけど、それよりも、恐らく今年の、連立換算のGDPマイナス換になる可能性があります。マイナスになれば、翌年はプラスになり易いっていう本当に下らない、何か算数の話みたいなものがあるんですけど、ただ、要は良くなる要素って無いですよということがあるし、あと日本の経済自体は外需依存というより内需依存ですけど、外需依存を高めようという馬鹿なことを今、どんどん進めていて、その中に中国がありますが、中国自体、もう今、デフレですから、恐らく中国人が日本に来て金を使うのもね、そのお金を持っている連中が安くなった不動産だとか日本企業を買い叩くことは続くんでしょうけども、まあ、それを続けた方がいいという風なことが現外務大臣のお考えのようでございますから、まあ、あれなんですけども、それに頼ると言うか、その分が、やっぱり小さくなっていくのがありますし、だから、来年の日本経済って、もしかして今年よりも悪くなるかもしれませんよと」

水島「うん」

室伏「それで物価高対策って、もう簡単なのは減税すればいいじゃねえかっていう話で、それを玉木さん始め、減税積極財政派は言っている訳ですよ。ところが勉強をすれば、そんなことは誰でも解るし、経済学の教科書を見ても直ぐ解る話ですけど、それなのに野党を中心にお馬鹿な国会議員が居て、だから、結局、自分は増税を言って、国民と一緒に苦しみを味わうのは、俺が責任ある政治家として当然だ、みたいな変な連中がね、実際、そういう分析がありました。私は、その論文を読みましたが、これ、もう随分前から居るんですけど、特にマクロ経済を勉強していない。

頭のよろしくないって言っちゃいけないですけど、そこは勉強していないので解っていない国会議員が、あまりにも多くて、だから、そういう連中が財務省のご説明に騙されて、

そっちに流されているので、恐らく減税って世論はどんどん喚起していきますから、ちょっと分かりませんが、減税っていうのが中々実現するまで時間がかかって、その間に物価高による影響、国民生活に対する影響っていうのが出て来ますから、そうすると、当然、物を買えないし、だから、要は、今年、まあ、去年とか一昨年、ヨーロッパとか、フランスで起こっていたヨーロッパとかアメリカで起こっていた、要は物価が上がり過ぎてお家に住めないから車で寝泊まりするとかテントを張って住まざるを得ないとか、そういう状況が、どんどん1年遅れ、2年遅れで日本がなってくるんじゃないかっていうことを非常に危惧しています」

水島「うん、うん」

室伏「だから世界経済も、はっきり言うと、よくなる要素ってあるんだろうかっていうのは、僕の中では、あまり浮かばないので、それを考えると世界的な、全世界的な不景気、リセッションに入っていて、日本も当然、その影響を受けて来ると」

水島「うん」

室伏「本来であれば減税をしたりとか財政政策を使ったりとかして、色々やれることがあるんですけど、今の人達って、どうも、それをやる気がないっていうか、それが必要であるっていうことが理解できないみたいですね」

水島「うん」

室伏「だからね、その意味で言うと、ほんとに来年は暗澹たるものを感じるころがありますし、来年は都議選とそれから参院選がありますけど、恐らく自民党は、このまま行ったら、また議席を減らす可能性が高いですよ。でも、だからと言って、じゃあ、それで立憲民主が伸びて、立憲民主の野田佳彦という財務省にとって、使い勝手よしひこさんの政権が出来るかって言うと、恐らく立民も過半数を取れないですから、相当、日本の政治が混乱と言うか、混迷をきたすことになるだろうと。

それでフランスでも今、そうになっていますし、ドイツもそうなるんでしょうねということを見ると、日本は色んな決定が出来なくなって、しかも、今、特に前原維新と、あと、野田立民がやっていることって、人の足の引っ張り合いで、要は日本をどうしようとか日本を良くしていこうとか、今、この現状はどうで、それに対して解決しようっていう発想でやっていないので、これは完全に、何て言うんですかねえ、昔、そういう状況が明治とかであったと思います。そういう権謀術数で何とかという風な状況になると、要するに、これって他国に対して、外国に対して我が国が凄く脆弱になるっていうことですよ

水島「そうですね。空白地帯になりますね」

室伏「はい。その時に中国が勿論、軍隊をもって来るっていうことより、色んな要求を突き付けて、結局、その真面な思考が無い段階で、どんどん自分達に有利な決定をさせていくというね、それを見ると、別に日本が可哀想だから一緒にそんなことしちゃ駄目だよってね、小学生みたいなことをするかって言うと、あっ、丁度、いいじゃん。あそこの東洋の丸々太った豚を、みんなで食おうぜっていう風になってくる可能性の方が高いと思います。

だから、それが来年、始まっちゃったら拙いですが、要するに年末のタイミングで、皆さんに是非、注意喚起をしておきたいという風に思います。あとは、ちょっとアメリカの

話、さっきモーガンさんに言って戴いたんですけど、隣国のカナダも今のトルドー政権が、かなり脆弱になってきましたよね」

水島「うん」

室伏「せっかくGSTという Good and Service Tax を2か月間ですけど、食品とか、凄いのはクリスマスツリーとか子供へのプレゼントの税率を全部、ゼロにしたんですね」

一同「ふう〜ん」

室伏「日本で言えば消費税に当たるもので、対象は食品とか、そういうところに関してゼロですけど、その対象がクリスマス・プレゼント、子供のおもちゃとかあるじゃないですか。あとクリスマスツリーを飾りますよね。あれも全部、ゼロです。家族でディナーに行きます、恋人同士でディナーに行きます。その時の税もゼロにするっていうのを2か月間の限定で、そういうことをやっているんですけど、それも、だから、結局、政争の道具に使われて、財務大臣が辞めちゃったじゃないですか」

水島「うん」

室伏「だから、カナダも、その隣国で不安定化していますよねと。欧州は先程、申し上げた通りで、中東に関しては、ちょっと、ごめんなさい、さっき言うのを忘れたので一つ、付け加えて申し上げておくと、これね、以前、イスラエルが何か狙っているのは大イスラエル主義じゃないかっていう話があって…」

水島「まあ、シオニスト達ですね、はい」

室伏「それを陰謀説みたいに言われていたんですけど、私が見ているのは、こいつらは本気で考えているんだと」

水島「うん」

室伏「だから、特にシオニストがそれを考えているんですけど、講演する時とか、そういう軍隊のワッペンに大イスラエルの領土を模ったワッペンをしたりとか、演台があるじゃないですか。そこにイスラエル国旗と共に、ああ、イスラエル国旗と何かだったかな、少なくとも、その大イスラエルの地図を模ったロゴをバンッと張っていたりとか」

石井「不勉強で知らないんですけど、それは中東全域ですか」

室伏「えーとね、中東全域ではないんですけど、レバノンも、それからシリアとか、あの辺もそうですね」

石井「怖いですね」

室伏「ええ。だから今、ネタニヤフ政権がやっているのって、もう完全に大イスラエルに向けた侵攻作戦という風に見た方が、実際、そういうことを国防大臣が言うとか、あとは、イスラエル軍の兵士とか、まあ、シオニスト、そちら側の有権者です。

街頭インタビューとかで、レバノンはあれでしょうとか言って、南部じゃないよ、全部、レバノンはイスラエルのもんだ、みたいなことを平気で言っているんですよ」

水島「もう8割、入植地はね、レバノンの西岸と言われる…」

室伏「あ、西岸は、あれは一応、パレスチナ国家の West Bank ですが、それもそうなんですけど、レバノンと隣国も全部、取っちゃうし…」

水島「そういうことですよ」

室伏「あと、それから今、ゴラン高原に駐留指示していますけど、恐らくシリアを全体的に併存しようっていうことを多分、考えていると思います。そうなったら、とにかく中東のパワー・バランスは崩れて、そこまでいっちゃうと、今度、トルコと国境を接することになりますから、トルコとイスラエルの関係はどうなるんでしょうかとかね。

だから、そうなると、じゃあ、油価はどうなるんだとか、物流も変わるよねとか色々な事が出て来ますよね。あの辺に權益を持っている商社はどうするんでしょうって。商社は、私も色々調べて、昔、商社にも居たので、業績がガア〜んと落ちたらどうするんですかとか、色々なことを考えなきゃ、そういう可能性は、だから最悪のパターンというか危険性があるので、それを考えなきゃいけない年ですよ」

水島「うん」

室伏「ちょっと中途半端な話で尻切れトンボみたいですが、それは皆さん、是非、考えておいて戴きたいし、年始なんか臍抜けなフニャフニャ番組とか観ていると、本当に頭がスポンジみたいになっちゃいますから、ちょっとね、僕のお勧めは、やっぱり海外メディアですね。言葉が解らないかもしれないですけど、少なくとも緊張感とか伝わってきますから。日本の映像では、絶対に出ないような中東のジェノサイドの実態とか…」

水島「そうですね」

室伏「普通に、勿論、血を流して、こうなっていることはモザイクというか、かかっていますけど、その状態とか普通に出ていますから、やっぱり皆さんも緊張感を持つんだったら、あの何とかあきらさんのインチキ解説とかじゃなくて、正しい、そちらを見て戴いた方が、言葉が解らなかったとしても、いいのかなと思いますから、そういう問題意識は、皆さんに是非、持っておいて戴きたいなと思います」

水島「そうですね。中東に関しては先日、議論したんですけど、おっしゃる通りで、色々資料を見て貰ったんですけど、アメリカがずっとやってきたリビア、チュニジア、エジプト、ジャスミン革命とか何とかね」

室伏「ええ」

水島「そういうことをやってきて、イラクもそうで、結局、ついにシリアまで来た。そして最後に残っているのはイランだけ。今、言ったようにイスラエルの一極中東支配ですよ」

室伏「はい」

水島「もう今、ミサイルと空爆が怖くてバンカーバスターを80発もいっぺんに撃ち込んでね、ヒズボラの最高指導者を殺っちゃうっていうね、ここまでやっても全然、平気だっというのと、もう一つは、おっしゃったようにバイデン政権が本当は駄目だって言うなら、軍事援助をやめたら直ぐ止まるんですよ。でも止めなかった」

室伏「はい」

水島「困った、困ったと言いながら、やらせていたっていうね。そういうところで、私は、イスラエル戦争とパレスチナが始まった時、イスラエルはイランまで行きたいんじゃないかと。ところがシリア迄は間に合ったけども、イランまで本当に行くかどうか。

それからトランプが出て来るっていうことを考えた時、それと、もう一つ指摘したのは、中東の支配者が今、実際はイスラエルに替わった。ちょっと待てと。アメリカのバイデン政権の支配者は同じじゃないのかと」

室伏「うん」

水島「バイデンがやっていた訳じゃないだろうと。誰がやっていたのと。ネオコンと言われるのは、もっと前にその後ろに国際金融資本とかエネルギー・メジャーとか、まあ、ハッキリ言うとユダヤの人達ですよ。世界を支配している人達が、現実にも、世界をね、大きな意味でグローバリズムって、正直、これはユダヤの人達がいい形の、狡猾な形で、世界支配を確立するという流れかも知れないということを、ちょっと、私も言ったんですけどね。

やはり、これは、みんな、ユダヤっていう話が出て来るとビビる人も居るんだけど、現実の問題として、かなり優秀な人達ですよ、別に褒める訳じゃないけど。現実にも国際金融資本を、或いは、金融を牛耳っているのは彼らだし、じゃあ、エネルギー・メジャーも、彼らだし、国際武器商人は彼らだし、もっと言えばWHOとかね、あのビル・ゲイツを含めて製薬会社も含めて誰が支配しているかって言ったら彼らだし、いい悪いじゃなくて、現実にもこういう人達が今、グレートリセットとか、グローバリズムとか言いながら、ここのところを進めている。

だからバイデンは困った、困ったと言いながらコントロールも出来ない。それで私が注目しているのは、じゃあ、トランプは何処までやるのかって言うと、FRBに対して色々ちょっかいを出してビットコインをやる。でもロシアはビットコイン、今日、ニュースで知らせたんですけど、もうビットコインを使い始めている。暗号資産のあれとして。

それでトランプも言っている。それからFRBの議長との確執というのは、ここ何日ね、辞める、辞めさせない、政策に対して関与する、しない、色々やっている。というのは、トランプが何処まで、アメリカのジョンF.ケネディとかリンカーンのような形で政府発行通貨みたいなことまで想定したビットコインのもので、ドルという基軸通貨体制、これは、ロシアはバイデンのお陰でドルというものを政策的な武器として使った形で、基軸通貨体制自体が脆くなってしまっていると。

だから我々はビットコインその他のものを色んな所で使い始めているって言い方をしているんですけど、今日、それを報道したんですけど。私は、この流れを、トランプっていう、まあ、変わった人物って言うとおかしいけど、非常に強引な平気でカナダの51州になれとか、パナマを返せとか、グリーンランドを売れよとかね、普通の国民国家指導者が言わないことを平気で言っちゃう。

ルイジアナもアメリカが大成功したのはルイジアナをフランスから買ったことですよ。もう大アメリカになる。こういうようなことをやっているんでね、象徴的に言うとトランプが売りに出した聖書が、実はメイフラワー号で来た人々が使っていた聖書を復刻させて売ったっていうのは何をしたいかって言うと、本当に新世界を創りたがっている。

本当に戦略的に論理的に緻密にやっているかって言うと別だけど、彼の独特の感覚みたいなものがあるんじゃないかって、昨日、丁度、伊藤さんとの対談の中で言ったのは、伊藤さんは、トランプを本当に変わった人で認めていないんだって言ったけども、ただ不思議なことに、というか副大統領のヴァンスは真面な奴っぽいと。

それからFBI長官とか国務長官とか色々な長官を任命しているけど、ナンバー2にしているのは、ちゃんと実務が出来る奴だと。偶然かどうか判らないけども。まあ、それを含めて、はっきり言って内閣やっているのは、しっちゃかめっちゃかな単に反中の強硬派とか言われる人だけど、こういう流れの中でスタートする世界ナンバーワンの国の大統領の政治が、どういう形で日本や東アジアに及ぶか。

先程、言ったように韓国の政変もアメリカが知らない訳がない。それで本当に尹大統領がこのまま引っ込んでいくのか。未だしぶとく辞めないんですよね。だから、これも中々解らない。中国が本当に絡んでいたのかと言われるように、非常にありとあらゆるものが不透明になって年末を迎えているっていう感じが、実はあるんですよね。

だから、この辺のことも皆さんに聞きたいんですけど、室伏さんは、この辺のことはどうですか。未だ動きが全然、見えない状態になっている。トランプ自身も今、モーガンさんから、そういう話があったけど、人身売買の話も含めてね。本気で移民なんか止めることが出来ると思っているのかと。こんなこと駄目だという感覚は判りますよね。そういう人が時代の先頭に立つリーダーになる。それとプーチンという存在の共通性は、まあ、これは西尾幹二先生の受け売りだけど、アメリカは建国以来、一度たりとも国民国家になったことはない。常に世界であった。自分達が世界。

だから、そうなるとグリーンランドも何もインディアンの大虐殺も全部、納得できる。もう一回、アメリカの建国をやり直そうとするなら、という感じもするんですけども、そうなたら同じようにエネルギーも食糧も人材も軍事もあるのはロシアですよ、自分達だけでも生きていけるのは。アメリカもそうだし、あとインドも近いかも分からないっていうね。

この辺のところが、私なんか来年、トランプが何をするんだろうっていうねえ。それと、一番、判らないのはトランプの思想的な背景とか哲学とか、ハッキリ言うと、こういうのが無いんですよ（失笑）、本当にね、それこそ真面目にギリシャ哲学とか現代の哲学をね、あまり思想とか学んだ形跡が無いんだけど、政治的なカンは物凄いだろうっていうのは判るけど、そういう状態の人が世界のナンバーワン・リーダーになるんでね。蚤の心臓の石破君はよく解るんですよね」

一同「(笑)」

水島「どういうことをやるかっていうのは予想がつくんだけど、皆さんにも聞いてみたいと思うんだけど（笑）、どうですか吉野さんは」

吉野「僕ね、こういう話をしていると暗い話、悪い話ばかりで、じゃあ、どうするんだと言った時に一番、思うのは、我々は何なのですかっていうのが無いと怖いんですよ」

水島「それは、そうだね」

吉野「だから、そこが僕は2024年になって、やっと少し、いくつかの選挙を通じて、先程のジェイソン・モーガンさんの話じゃないけども、国民じゃなくて我々は日本人なん

だっていう意識が出て来ていると思うんですよ」

水島「うん」

吉野「だから、このチャンネル桜もそうですし、私も自分のチャンネルをやっていますけども、ここを日本人にちゃんと日本人が日本人であるっていうことを教えることの方が、まあ、分析ごっこと言ったら失礼ですけども、分析をやっているよりも、自分達が何であるかのことが判っていないと、結局、戦えないと思うんですよね」

水島「そうですね」

吉野「だから僕達は本当に神話を大切にしておいてね、日本の歴史がこうなっているとかが、日本はこういう国だとかっていうことを、きちんと学ばなければいけない。学ぶっていうか、知っているんですけど忘れさせられているから」

水島「うん。その通りですね」

吉野「もう一度、思い出すと」

水島「うん」

吉野「元に戻す。私がいつも言っていますけど、何もかも元に戻すべきです。江戸時代ぐらい迄、日本だって江戸時代は地政学的にそれこそ生存権というものを持っていて、日本だけで生きて来た訳ですよ」

水島「うん。その通りですね」

吉野「全部、循環していて当時のエネルギーもあって、やれることが出来たし、それから実際は日本だってそうですよ、金（きん）が取れたみたいに、レアメタルだって、この国は取ろうと思ったら取れる訳ですね。だから、そこを忘れてしまって、日本は資源が無いんだよと」

水島「うん」

吉野「ね、金も無くなっちゃったんだよと。頭も悪いんだよ」

水島「(笑)」

吉野「ね(笑)、それで、もう駄目な人間なんだよと洗脳されて、白痴化教育を受けた訳ですよ。だから、それを間違っていたっていう風に思って、もう一回、思い出して日本人が日本人たる誇りを持つことがなければ、どれだけ分析しても駄目だと思う」

水島「うん」

吉野「うん」

水島「いや、勿論、これねえ、最後にそっちの方に行きたいと思っていたのは、昨日の伊藤さんとの対談とかで出たのは、実は江戸までは、もっと言えば聖徳太子の仏教、その前の仏教伝来以来、神道の世界観と縄文から繋がっているって言うのもいい、こういうものに仏教が入って哲学思想的な要素をつくった。

それと中国の問題、まあ、中国という言い方は色々あるけれど支那の大陸から四書五経、

こういったもの、そういった儒教ですね。こういうものを持ってきて、実は3つの物凄く総合的な哲学とか、そういうものを含めて江戸の庶民の段階、侍の段階まで、こういうものを持って来た。

それが今、おっしゃっていたように、明治維新以来、仏教が廃仏毀釈で皇室の中から消された訳ですよ。そういうようなことを含めると、それから、もう一つ、私は最近、やたらと強調しているんだけど、1万6千年の縄文時代、戦争も殆ど無くて、1万6千年も、仲良く日本人が列島という好条件はあったとしても縄文文明を続けたっていうのは、他のインダスやエジプトや黄河の文明には全く無い、こういうことがあるっていうのは、こんなに凄い民族だよっていうね」

吉野「うん」

水島「こういうことを本当に、もう一回、取り戻し見直さないかね」

吉野「僕は本当に水島社長のおっしゃる通りで、だから1万6千年も続いている方法だから本当に凄いんですよ」

水島「そうですね」

吉野「凄いて褒めているんじゃないかって一番、最強の方法な訳ですよ」

水島「うん」

吉野「つまり年功序列だとか終身雇用とかも、最強の経済だった訳ですよ」

水島「うん。そうですね」

吉野「それを元に戻す。それで、その為には、やっぱり日本がどういう国なのかと言うと、結論から言うと祭祀の国ですよ」

水島「うん」

吉野「先祖を大切にすることをしてきたから、誰とも争わなかった」

水島「そうです」

吉野「宗教じゃないんですよ」

水島「うん、うん」

吉野「お父さんが大事、お母さんが大事、そのあと、お父さん、お母さんで、ずう〜と行ったらアマテラスの大御神まで行って、もっと行ったら、もう天野水上の島まで行く訳ですよ」

水島「(笑)」

吉野「そこが宇宙の始まりから我々は繋がっているんだから、我々は仲良くするんだと」

水島「うん」

吉野「何かあった時は、17条憲法に書いてある時のように、何事かなさざらんというのは、能力のある人がその能力を自分の為に使わないで国を守る為に使うっていうことをや

ってきたのが最強の方法だから、絶対にシオニストなんかには負けないと思うんですよ」

水島「うん」

吉野「だから、そこを知らないと、どうしよう、どうしよう、アメリカについての方がいいのか…」

水島「あ、そうそう」

吉野「大イスラエルになったら、イスラエルの味方になった方がいいとかね、中国の犬になった方がいいとかじゃなくて、何処の犬にもならなくても生きる方法を1万6千年かけて持っているはずですよ」

水島「うん。そう、その通りだね」

吉野「そこを忘れさせたのが、戦後のGHQの教育だから」

水島「そうですね」

吉野「だから本当にね、ここを、もう一回、我々のような人間がSNSを通じてやる一方で、そうして対策も立てるっていう二本柱でやらないと、対策だけやっても、もう、ただの空っぽの操り人形みたいなのが何も考えることが出来ない訳ですよ」

水島「全くそうだね」

吉野「だから日本って何ですかとか日本という言葉は何ですかって。大和って何ですかって、私はよく言っていますけども、まあ、やまとって言うと『や』は天津神が降りて来るという意味ですよ。『ま』は纏まる、『と』っていうのは、それが沢山になるって言うから、やまとの3文字だけで古事記三巻を読んだのと同じになる訳ですよ。

僕らは、こういう言葉を持っている凄い民族なんだっていうのが多分、ユダヤ人からすれば怖いはずですよ。だから、やられているんで。だから、これ、やられていること自体が、どれだけ我々が本当は物凄く強い精神力だとか道徳観とか倫理観とか哲学を持っているかっていうのを僕達が知らないと、何か劣等民族で劣っている民族だって調教されちゃっているじゃないですか」

水島「うん」

吉野「だから戦争をする為じゃなくて自分達をちゃんと纏め上げて、ちゃんと我々が本当に八紘一宇をする為に、我々は居るんだっていう強い思いを持つことがあって、初めて、じゃあ、安全保障はどうしましょうということだと、僕は思いますけどね」

水島「そうですね。これは、別に昨日の伊藤貫さんとの討論で、結論は何かって言ったら、我々の国、日本人は、日本もそうだけど、誰かとくっついて同盟したりとか、誰かの属国になったりとか、誰かに頼らない自分だけで生きていくということをちゃんとスタートとしてね」

吉野「うん。そうです」

水島「日本を主語としてやるという結論になったのと、今の大変、素敵な指摘をして前も、ずっとお話しして戴いたんだけど、やっぱり、私は、その中でね、今言った天照大神

まで遡るといふ、そこで私の言いたいのはユダヤ教の人達と違ふのは How To なんですよ」

吉野「そうです」

水島「どうやって生きるか、どう上手くやるか、どう権力を取るか、どう金を儲けるか、どう死ぬこととか、今言った、それがあの教えの中に無いんですよ」

吉野「うん」

水島「ところが我々の場合は時間という先祖、お父さん、お母さん、爺ちゃん、婆ちゃんを含めて、そういう時間を中心とした世界観だから、彼らの空間の充実や拡大…」

吉野「うん」

水島「こういった世界観と全然、違ふ」

吉野「そうだと思う。だから、この祭祀の道っていうのは、もう全く違ふ逆なのが、正に優生学だと思うんですよ」

水島「うん」

吉野「だから彼らと全く違ふ思想な訳ですよ」

水島「うん」

吉野「だから正に優生学そのものがグローバリストな訳ですけども、我々日本というのは誰かが優秀だとか、優秀だから滅ぼしていいんだとか、支配していいんだじゃなくて…」

水島「そうです」

吉野「だから、優秀な人ほど、みんなで団結して、そうじゃない人達を助けるっていう、もう真逆な思想ですよ」

水島「その共同性ですよ」

吉野「うん」

水島「それは、やっぱりねえ、実は私も映画をつくったりして、沢山、色々やって来たけれど、日本人は集団で仕事をすると、個性が凄く出て、みんな、頑張って、ああ、素敵だねっていうことが、どんどん出て来る。一人ぼっちにして頑張って来いって言ってもね、全然、駄目」

吉野「うん」

水島「そういう民族だよ。うん、それは凄く感じますねえ」

吉野「だから、今年は私も自分で政治団体を創って、何十人か立候補させようと思っておりますけども、それこそ必ず参議院選挙と東京都議会議員選挙がある訳でしょ」

水島「うん」

吉野「あと、もう7か月、無い訳ですよ」

水島「うん」

吉野「この間に、どれだけね、その80年分の失われた記憶を思い出すことが出来るかっていうのは、我々はテレビの媒体を使えない訳ですから、多分4月ぐらいまでに、このSNSを使って、どれだけ日本人の精神性を、もう一回、目覚めさせるっていうことと、一方で、やっぱり、その安全保障の問題は軍事だけじゃなくて、食糧安全保障も軍事安全保障も経済安全保障も情報安全保障も、こんなことが起こるかもしれないっていうことは全部、知ってやっていくっていうのが、これから非常に重要になると思うんですね」

水島「それはありますね。それで、ちょっと見えないでしょ、トランプのね」

吉野「うん」

水島「それで居るのは、石破内閣ですからね」

一同「(笑)」

水島「まあ、こういう状態の中で良き日本人が自信を持つことが出来ることを子供達に、それを本当に教えてあげたいっていうのがありますよね。だから、馬鹿にされているのが悔しいと思いませんか。みんなね(失笑)、はい。ところで動物行動学から言えとは言わないですけども、もう皇統をね、ずうっと、この何年ね、竹内さんはやって来られてね、やっぱり、その中で今言ったように、How To ものとしてしか皇室の在り方、空間的なものとしてしか見ていないと。だから『なにごとのおわしますかは知らねども〜』のね、そういった見えないものの伝統とか中々言葉には表現できないものを、皇室が体現している」

竹内「はい」

水島「こういうところがあると思うんですけど、この辺は相当、感じますか。チャンバラを色々やって貰っているんでね」

竹内「(微笑)」

水島「戦争って言ってもいいんだけどね」

竹内「ああ。あのう…」

水島「うん、インターネット上で」

竹内「はい。ちょっと外れるかも知れませんが、私はそもそもXを2019年の10月に始めたから、だから5年ですね」

水島「そうですね」

竹内「その間に、毎週土曜の夜にツイデモというツイッター上のデモとかをやってハッシュタグをつけて『旧宮家の皇籍復帰と女性宮家創設反対』。今、女性宮家はあまり言いませんけど、今、婚姻後の女性皇族が皇族身分を保持するっていう言い方に替わって来ていますが、まあ、同じことですね」

水島「はい」

竹内「要するに女性宮家とか女性天皇、それは婚姻後の女性皇族が皇族のままで居るとどうなるかって言うと、一般人と結婚した場合、その方も皇族にしようとか、或いは、その方との間に生まれた子供を、まあ、当然、皇族にして、そして、更には天皇にしようとか。」

それで天皇になると、まあ、皆さん、ご存じだと思いますけど、その天皇は女系天皇になります。これまで居たことが無い。つまり、今迄は男系男子とか、女性天皇が立つことがあっても、お父さんが天皇とか、そのまたお父さんが天皇ということで、男系の女子しかならなかったのが、ついに女系になっちゃって、その人の属するのは、もう皇室じゃないと。佐藤さんと結婚したら佐藤家のものになっちゃう」

水島「そうですね」

竹内「今迄の皇室が途絶えますと。そういうことを、この5年以上、ツイデモをしつつ、それからXに凄く厭らしい人がいっぱいやって来るんですね。いちいち反論してきて、効果はあったと思います。理解が進んだと思います。

それと手応えとして感じるのは、やはり日本人って皇室が好きで、皇室に対して、普段は意識していなくても、多分、ここで皇族の方に出会ったなら、思わず、はっはあ～となっちゃうと思います。それは、この我々の日本人の歴史に常に、こういう言い方はあまり好きじゃないんですけど、それこそDNAに、もう刻まれちゃっていると思います」

水島「うん」

竹内「そういう性質が、私達の身を守って来たのであるし、このことを、もうちょっと、一見、皇室って言うと馬鹿にされるんですが、でも、本当に目に見えざる精神性のようなものであって、今、吉野先生からお話にあったような日本人が日本人たる自信を取り戻すには皇室という存在を、いかに感ずるか、いかに理解するかっていうところにかかっていると思います」

水島「そうですね。日本の元首ですけども象徴でもあるね、その感覚は、天皇陛下始めとする、それぞれの皇族の皆様のご存在の中にあるというね。何故、我々は陛下を見たら、頭を下げたくなるとか嬉しくなるんだらうとか、こういうようなことを教えて来なかったからですかね」

竹内「はい」

水島「我々は国会が開会する時、うちの仲間、私も行ける時に行っているんだけど、天皇陛下のお出迎えとお見送りをするんですよ。そうすると、向こうからオートバイが来て、車に乗った陛下が最初は、今の今上陛下もね、窓を開けて、ちょっと緊張した雰囲気、こいつら大丈夫だろうか、みんな、小旗を持って、ずらっと並んで天皇陛下、万歳！とやっている訳で、横断幕も天皇陛下 万歳っていうのがあるので、最初、お出ましになった時は、そういう雰囲気があったけど、段々慣れて来て、こいつら危ない奴じゃないなっていうことがお判りになったのか、必ず手を振って下さるようになりましたね。それからスピードもさあ一っ行ってたのが、恐らく言って下さったでしょうけど、スピードを少し緩めて通り過ぎる時間を延ばされるとかね、それと同時にもう一つは、やっぱり参加した人達が、陛下のお車が通り過ぎる時間は僅か10秒か20秒なのに、来て良かったって言うってくれるんですよ」

竹内「(頷く)」

水島「だから、これは、我々が言うのは、親しくお話を伺うとかね、例えば、被災地とか色々な所にお出ましになるけれども、そういう行幸啓というよりも共に一緒に、この人生の時間を共有している、或いは、日本という土地の中にいらっしゃるっていうね、私は、

そういうことが大事だっていうね。

それと哲学で言うと、太陽神じゃないんですよ。私から言うと月の立場。人を温めるというような具体的な事はされないけれども、居ておられるだけで、夜の闇は月の光で照らしてくれる。こういう媒介的な神々と国の民を繋ぐね、そういう感覚が何処かにあるんじゃないかというね。

さっき言った『なにごとのおわしますかはしらねども、かたじけなさに涙こぼるる』っていうね、伊勢神宮を参ると、そういう感じが、よく解るんですけども。そういうものを今、お話し戴いたけども、そこまで遡るものを何処かで感じる事が出来るものは、未だ日本人の中に残っているような気がしていますね。

だって明治神宮だとか靖国神社、お大師さんとか浅草の観音様、みんな、正月になると、浮かれているのか何だか分からないけど、とにかく、みんな、行きますからね。初日の出だって何だか分からないけど、ぽんぽんってやるしね。そういうところはねえ、未だ希望があると思っているんですけどね。ただ悪辣ですよ

竹内「そうです」

水島「先程、CAI文春とか言いましたけど、本当に破壊しようとしていますよ。これをやっちゃったら、もう世界の中で物凄く平凡な単なる国になっちゃうということを一番、解っているのは、こっちの人達ですよ」

竹内「そう。本当、あからさまになって、多分、悠仁さまの加冠の儀に向けて加速しているんだと思います。多分ね、悠仁親王殿下が加冠の儀で儀式を行えば、普通の心を持った日本人なら、もう凄く有難いと、これで日本は救われるみたいな印象を必ず持つと思うんですよ」

水島「うん。そういうのが理屈じゃなくてね、体現すると思いますね」

竹内「はい」

水島「だから今、必死になって、この週刊文春、週刊新潮を使って、或いは、篠原常一郎みたいな奴を使って、悪辣なことをやっているっていうね」

竹内「そう」

水島「だから、さっき掛谷さんが言ってくれた同級生というか、こういう人達が極普通の感覚で、彼らは別にイデオロギーも無い訳でしょ」

掛谷「うんうん」

水島「でも、そういう風に、お人柄とかいうことも含めて、やっぱり、あることの大事さというのはねえ、私は本当に必要だと思いますね。だから、今、丁度、吉野さんが、そのことを教えないことを、みんなに知って貰わなきゃいけないっていうのは本当に大事だと思います」

吉野「天皇家っていうのは結局、ずうっと辿っていくと、我々は、その血塗られた歴史が無い訳ですね。他の民族を殺害して国を併合してっていうことが無いですから」

水島「うん。絶滅させてね」

吉野「ずう～っと行くと本家が居て、要するに天皇家っていうのは本家ですよ」

水島「うん」

吉野「親戚な訳ですよ。血が繋がっている訳だから。だから、こっちは分家だから本家が繁栄することは分家が繁栄することだからっていう、ただ単純な、そういうことと、あとは、やっぱり天皇が父系で続いているというのは勿論、血統ですけれども母系は霊統ですよ」

水島「うん」

吉野「魂をちゃんとお母さんの方達がやっているっていう、この2本の筋を持っているのが、人殺しをしないでやってきたっていう世界で唯一の国じゃないですか」

水島「そうなんです」

吉野「だから、子供達が、それを知らないんですね。だから、さっき言ったみたいに彼らの理屈で言うと、男女同権なんだから女の人が天皇陛下にならなきゃいけないとか女性もちゃんと独立して、結婚したって、そこが、また、一つの皇室としての宮家を創ればいいのかって言ったら、もう、それこそ1万6千年も続いてきた伝統が全部、ぶっ壊れる訳ですよ。

だから、そこは日本人が凄く強いところだったので、何かがあったって絶対に本家がある訳だけでも、我々が守っていること自体、我々が全部、みんな、血縁者なんだと」

水島「うん」

吉野「同じものだ」と

水島「そうです」

吉野「だから殺し合いをしないんだ。だから私達は強いんだっていうのを多分、今の子供達は、先程の掛谷先生の話じゃないけど、結構、気が付いているんじゃないですかね」

水島「うん」

吉野「本能で。小中学生、高校生ぐらいの子供達は」

水島「そうだね。イデオロギーじゃなくてね、本能で。それとね、今、大変、いいことを言ってくれたと思うのは、日本の家族の在り方」

吉野「うん」

水島「これ、母系的ですよ」

吉野「そうですね」

水島「特攻隊員の遺書を見て判るように95%が、お母さん、行って来ますと。お母さんに親孝行、まあ、お父さんもっていうのも書いてあるけど…」

吉野「うん」

水島「みんな、お母さんというね。その共存しているんですよ。今、言ったようなね。だ

から決して女性がないがしろにされている訳ではないというね、あのう、このねえ、あのう、大事さ、それから今言ったように争いはしても滅ぼさない。カルタゴみたいなことは無いんですよ。みんな、国譲りですよ。何処の神様も生き残って、野太い、しめ縄で祀られている。こういう国だっていうところが、争うことはあっても、今言ったように全部、人殺しで絶滅させないっていうねえ、本当はすげえ国だなっていうことですけどね。そこが解って貰えるといいと思うんですけど。石井さん、皇室の話になっちゃったんですけど…」

一同「(笑)」

石井「皇室って言うと、僕も思い入れがありますけど、それ程、複雑…、さっきトランプ政権って何が起こるかなあって、皆さん、これを知っているかな。有名なベストセラーがあって『ヒルビリー・エレジー』って言うんですね」

水島「ほお」

石井「これはJ. D. ヴァンスが書いたベストセラーで、凄い面白いですよ。半分、読んでいるんですけど」

水島「ああ、そう」

竹内「自伝ですね」

石井「自伝です。それで彼は、とんでもない家庭に生まれたんです。父母は崩壊状態ですから、ただアメリカの健全さで優しいお爺さん、お婆さんが彼を育てて、彼の基本的な概念をつくるんですけど、言っちゃ悪いけど、クルド人に似ているような訳の分かんない家庭ですね。つまり親父がとんでもないんです。ただ、そのとんでもなさの中に時々優しさがある訳ですね。

彼は、とっても貧しい。飯も食えない。本当に食えない。これを一言で言うと、本当に、内向きの世界です。その中でいい生活があった。『大草原の小さな家』の21世紀版なので、J D ヴァンスは、この中から海兵隊に行って奨学金を貰って勉強をして、大学、高等学校に行って、WASPの金持ちのトランプが、これを見たっていうことは勝利の一因でもある訳ですけども、ああ、こういうのを大切にしたいんだなって、さっき判らないっていう話がありましたけど、彼の価値観が判ります。

話をちょっとエネルギーに繋げると、実は来る前にあるところに寄稿したので、アメリカのエネルギー政策を読んで来たんですよ。実はトランプって衝動的じゃなくって、共和党の政策を実現しているだけなんです」

水島「うん」

石井「エネルギーについても、ちゃんとシンクタンクがあってアメリカ第一政策研究所、アメリカ・ファースト・ポリシー・インスティテュート (America First Policy Institute) っていうのがあるのと、共和党のマニフェスト、もう膨大で400ページあったのでエネルギーの40ページだけ読んだんですけども、全くおかしくないです。それで彼らがやる新しいコンセプトを打ち出して、エネルギードミナンスというのをつくったんですよ」

水島「うん」

石井「エネルギーを安くする。大量に供給すると」

水島「うん」

石井「その為に規制をとっ払って、気候変動なんて、あんなの関係ないよと。気候変動は嘘だとは言っていないですけども、実は、日本のメディアが今、パリ協定は素晴らしいみたいなイメージでつくっている、今、パリ協定やられて金くれ攻勢の道具になっているんですよ。そんな、馬鹿々々しいじゃん、実は僕も全く同じことを考えていて。それで、アメリカはパリ協定ではなくて、合理的な国同士の小国間協定を結びましょうと。

例えば、実際にアメリカ、メキシコ、カナダで気候変動でエネルギー協定、USMCRっていうもの創っている。これをトランプ政権が成功させたって自慢しているんですけども、これを主要国の多国間でやっていって、第三世界が知らないって言うんですね。うん、実は非常に論理的なんです。全然、衝動的じゃない」

水島「うん」

石井「一つ思ったのが、この前、ブリックス諸国会議というのが出ました。あまり日本のメディアが本当に報道していなかったんですけど、アメリカはニューヨーク・タイムスから保守派の中西部のメディアが、その記事を、どばあ〜っと出していたんですけども、それはブリックスの諸国が集まって、ロシアと一緒に10月に宣言を出しました。カザフ協定という協定ですけれども、それも英文で読んだんですが、気候変動という言葉は、本当に出て来ないです。

それでエネルギー価格、ロシアと諸国で協力すると。アメリカのドル決済っていうのは、実は我々を縛っているからブリックス諸国で新しい事をやりましょう。恐ろしいことに、ブリックスだけじゃなくて、ASEAN諸国とか中央アジア諸国が協力国になって、加盟しますみたいに、加盟も検討しますみたいなことを言っています」

水島「パートナーっていうね」

石井「これ、何処かに出て、チャンネル桜で出ていたかな」

水島「うん」

石井「本当にブロック化が来年、進行する事は間違いないなあということで、それで我が日本ですけども、釈迦に説法ですが、これは海上交通線ですよ。今、恐ろしいことが起きていて、あの攻撃でイエメン・ルートが消えちゃいました」

水島「えっ何が消えた？」

石井「イエメンのルートが」

水島「ああ」

石井「まあ元々10%、5%しか無かったんですけどね」

水島「はい」

石井「ホルムズ海峡の依存率が今、最高になって97になっています。インドネシア・ル

ートとかオーストラリア・ルートをつくりましょうみたいなことを言ったんですけど、5年ぐらいかかりますから、お金もかかります。それは口だけで未だ終わっていないと」

水島「うん」

石井「それで中東をそうやってブロック化した中で、中東からアメリカは手、引いたら、この海上交通線の95%の…」

水島「うん」

石井「ホルムズ海峡でブチっと切ったら終わりですよ。ここから先は中国友好国ですよ。シンガポールがブリックスに入ろうとしている。ブリックスに入ろうとしているのは東南アジア諸国ですね。丁度、今、台湾危機があるじゃないですか。台湾のバシー海峡というのは先の大戦で船の墓場って言われていて、これは去年の数字ですけども、日本の備蓄量ですね」

水島「うん」

石井「実は、石油は一生懸命、頑張っって78日ですけども、LPGが55日、石炭28日、電力用LNGが9日、都市ガス用LNG15日ですよ。っていう…」

水島「うん、足りないですね」

石井「普通、中国軍の参謀で、僕が作戦をつくるとしたら、海上封鎖すればいいじゃんって誰だって思う訳ですね。それで話をエネルギーに限って言うと、そうやってブロック化する中で価格交渉力がどんどん低下していく恐れがあるなあっていうのが一点。

実は、ロシアの歳入決算が確か、どうも消えていくと言っているんです。そのブリックス諸国に輸出して。インドは中国と両国外交をしていると」

水島「うん」

石井「それでアメリカの価格が下がるっていうことは、日本に輸出してくれるので、それは朗報ですけども、逆に気候変動の制約が取っ払われて、エネルギーの制約、価格が下がって、アメリカ企業って今、ご存じの通りトヨタとか孫正義さん、まあ、孫正義さんは怪しいんですけど、アメリカ国内で生産する宣言をしたんですけども、アメリカ企業の競争力がアジア太平洋地域で、また強まっちゃうんですね。

結論、エネルギーから言うと、ちょっと不完全要素が強まっている中で、更に、アメリカ企業が強まっている中で、脳天気な気候変動とか原発を止めちゃうとかですね…」

水島「そうですね、相変わらず、それはね…」

石井「そういう頓珍漢なことをやっている日本政府、何やってんのって、いつもの話で、終わるんですけど、不完全な要素が結構、増えている中で大丈夫なのかなって、いつもの話をしたいなあとということで結論にしたいと思います」

水島「そうですねえ」

石井「エネルギーで言うと、こんな感じですね」

水島「いやあ、だから、本当に、実際、石井さんにも出て貰って討論をやりましたけど、

トランプは、もう、はっきりね、我々が言っているSDGsとか訳の判らないことを、全部、捨てて、掘れ、掘れって言っているでしょ」

石井「うん」

水島「石油も天然ガスも掘れ、掘れって言っているんでね。」

石井「うん」

水島「つまり、これは、もう全部、反トランプ、反米政権になっちゃうんですよ」

石井「経済の論理っていうのは、バイデン政権がかなり規制したんですけれども、じょ～と上がっているんですね。だから、この流れは続くのでアメリカのエネルギーの競争力っていうのは、どんどん強まっているんですねえ」

水島「でしようね」

石井「はい。更に、これで気候変動の重荷と、開発の重荷が取れちゃったら、アメリカは完全に輸出国に転換しつつあったんですけれども、シェールオイル価格の上で、また、強くなるなあという感じはします」

水島「そうですね」

石井「それでアメリカに売ってくれるのかなあという期待もあるんですけれども、さあ、どうなるかっていうのが日本の未来です」

水島「う～ん、取り敢えず、じゃあ、相当、高くやられますね」

石井「うん。エネルギーの業界っていうのは長期契約なので、だからスポットで買うと、割増料金が付くので…」

水島「なるほど」

石井「原発をとめたあとで割増料金がたっぷりついたんですけれども、こういう中で日本がアメリカに売ってよって言っても、今、力はどんどん、セブンシスターズはなくなっていますけど、売ってよって言っても中タイエスと直ぐ言ってくれるかなあという状況になっていて、先程、室伏先生が経済に良い要因は無いて言ったけど、ちょっとマイナスに働くんじゃないかなあという感じはしています。というのがエネルギーに関しての私の考えです」

水島「なるほどね。結局、ドイツも日本も、もう完全に絞られてね」

石井「はい」

水島「いざとなれば、ノルドストリームを切っても、ドイツは何も文句も言えない訳ですよ」

石井「そうです」

水島「CIAがやったことは間違いないって言われているのに」

石井「うん」

水島「日本と、大体3位4位のGDPとなるはずのドイツが今、凋落しているでしょ」

石井「まあ、今、景気が良くないですね。マイナス成長ですからね」

水島「そうですね。さっき、希望もちょっと言ってくれたけれど、何とかってところの調査では、来年の経済見通しは32か国中で日本が最低、というのを、今日、別の前の番組で紹介したんですけど、こういう状態でトランプと悉く反するじゃないですか。WHOも。ね」

石井「あと、それ…」

水島「エネルギーもね」

石井「うん」

水島「もう、そんな、お前、いつまで太陽光パネルを作っているんだというような状態になるじゃないですか」

石井「はい。しかもウイグル人の人権侵害に伴う太陽光パネルなんて馬鹿々々しい政策を未だにやっていて、アメリカなんて気候変動は馬鹿々々しいって露骨に言っている中で、ああ、気候変動はありますよ」

水島「うん」

石井「けれども国を傾けてまでやるのは馬鹿々々しいって言っている中で、こんなことをやっているって、GXって言っている中で、ですね」

水島「それを中心に据えていますからねえ」

石井「それが頓珍漢な日の丸飛行機とかITで、TSMCって総額を調べたら1兆5千億円ですね。それは大切ですよ。台湾の工場を造るのは、確かに雇用も生まれましたよ。でも台湾企業に1兆5千億円も出すなんて馬鹿々々しいですよ。それで今度、ラピダスに…」

水島「熊本のことですか」

石井「そうです。それは熊本の人達は喜んでますしね」

水島「うん。それは喜ぶでしょうね」

石井「あもう、いいんですけど（苦笑）」

水島「水が無くなったっていう噂も…」

石井「その金は、1兆5千億円の価値があるのかなって、僕は未だ検証していないんですが、それが成功例になって、今度、GXで半導体支援するなんて言っているんですね。しかも日の丸半導体をやるなんて言っている、そういう声もあるので、ちょっと経産省は浮かれていないかなあという感じはしますよね。足元のエネルギーがこんな状況なのに、頓珍漢な、さっき言った行政の劣化の一つかもしれないですけども、ちょっと怪しい感じがしますよね」

水島「それと、今、言ったようにTSMCの問題で言うと、日本で生産するってということ

になって、するんだけども、日本が必要とするものじゃない、海外に売るためのものだっていうね」

石井「ああ、それもあるし、最新鋭は米国に造ったんですよ」

水島「うん」

石井「ちょっと名前を忘れちゃったんだけど、ワンランク落ちた型のものを、TSMC熊本でやって、それで万歳、万歳っていうのも、ちょっとなあっていう感じはします」

水島「うん。それと水と電気が大量に使うんだけども、未だ九州の方はね、原発とか、あれがあるかも分かんないけど、今、日本も2兆円、使ってやろうとしている」

石井「うん」

水島「ラピダスは千歳でやろうとしている」

石井「ラピダスとかグループ系企業とか」

水島「どうしようもないです。電気が無くなるから」

石井「そう言われていますね」

水島「私、行って来ましたけど、もう、ちゃんと工場を建てているんです」

石井「うんうん」

水島「水はどうするって言ったら十勝川の水を大量に20万リットルだったか、ちょっと数字は間違えているか判んないけど、十勝川と主流のところから水を取るっていうけど、じゃあ、そこで使っている、毎日、取られてどうなんだって、農業とか、それをやっている飲水とかは…」

石井「そこは調整しないんですか」

水島「そこはしてない」

石井「ええ」

水島「環境アセスもやっていないし、それから何よりも電気ですよ。今、カツカツで最大の苦東厚真っていう発電所がね、この間、大停電を起こした元になったところを未だやっているんですかって言ったら全然、新しくした訳じゃなくて修理しただけでやっている。だから、原発でやらない限りは絶対に無理っていう…」

石井「原子力の稼働、ご存じかもしれないですけど、原子炉は北海道では止まっているんですね。無いと大変なことになると言うんだけど、浮ついて、まず建てようという話になっちゃって、ちょっと、そうやって足元が弱いのに何か進めているし、雑さっていうのが見えて来るんですね」

水島「いや、本当にねえ、間違いなく、大量に周りを掘り出した後のこと考えているんでしょうけど、中国人達が千歳の土地を買いまくっているんですね」

石井「ああ、そうですか」

水島「何倍にもなっているって。私も行って来ましたけどねえ」

石井「それ、ラピダス関係ですか、それとも投資の目的ですかね」

水島「うん。だから、それも多分、日本の半導体事業も、専門的な人から聞いたら2ナノと言うんですか。ナノ2って言うのかな。つまり日本では未だ出来ないものをね、一段階上の、つまり、例えば柔道で言えば、初段のね、やっと黒帯を取ったような奴が、3段、4段の全日本選手権が出るような感じのものをやろうとしている。ちゃんと段階を踏まないと無理なのにね」

石井「うん」

水島「だから私が北海道で聞いた、そういう勉強をしている市議さんとか、こういうのを見ると、もう絶対に失敗すると」

石井「うん」

水島「もう、インフラだけでも駄目なのに、って言うね」

石井「うん、そうですね」

水島「吉野さんね、これが本当に、何故、こんなことは判っているのにね（失笑）」

石井「うん」

水島「やるんだらうってというのがね、1兆円も使うって言う訳ですよ」

吉野「いや、そうです。僕はそれこそ府知事選に立候補して、丁度、当時のメガソーラーの問題を言っているんですよ。でもねえ、府民の人も、え～、って感じですよ」

水島「ああ、そうなの（失笑）」

吉野「全然、判っていないの。だから、それは、もう確かに我々も情報を発信する側だからいけないんだけど、あまりにも国民に判らないように伏せて勝手にやるシステムが、この20年、30年で出来上がっちゃったでしょ」

水島「ですね」

吉野「だから、やっぱり、それは、我々が言わなきゃいけないですよ。テレビや新聞は、もう絶対に言わない訳だから」

水島「うん。そうですね」

吉野「だから、もう、これはね、我々の責任がより重くなっているんだと思いますよ」

水島「そうですね。掛谷さん、これね」

掛谷「はい」

水島「科学者としてだけ（失笑）、どうなんですか、これ、科学者達にもね、こんなものは半導体の問題だとかね、ちょっと具体的に我々素人が考えても電力が無いのに、そっち回しちゃったら、もう途端に…」

掛谷「いや、あれは、もう泊を動かすつもりで無いと無理だから、北海道は動かすんじゃないですかね。いや、そうでないと無理って言うか、まあ…」

水島「100%無理だったです」

石井「ただ、ご存じの通り原子力規制委員会は原発をしても平気な科学者の学者と称する人達の謎の集団なので、そのチグハグさっていうのは本当に感じますよね」

掛谷「いや、結局、この番組に出させて載いて何度も言っているんですけど、例えば、再エネっていうのは、もう駄目だっていうのは、高校の理科が解る人なら解るみたいな話を何度も言っています」

水島「うん、そうだよ、前にね」

掛谷「それで、じゃあ、そんな高校生でも解ることを、何故、大学の先生が進めるのかっていう、まあ、やっぱり、そういうことになるんですけど」

水島「学者がとんでもないということだね」

掛谷「はっきり言って、大学の先生は自分の研究費がつけば、日本がどうなってもいいんです」

石井「そうかもしれない」

掛谷「そういう価値観で動いていますから、だから、それで、何か新しいプロジェクトをやって予算が取れるって言ったら、それが駄目だって判っていても、いや、ほんと露骨ですよ。だから、勿論、ただ学者相手には、さすがに解っていない人、彼らはプライドが高いので解っていない人と思われたくないの、ちょっと指摘すると、いえいえ、こうやって上手く騙してやったんだぜっていう感じですよ。とにかく、お金が付けばいい。

だから、これは、この番組にも出ましたけど、宮沢先生っていうウィルス学者の方がおっしゃいましたけど、学会でバスで待っている時に、そろそろ高病原性鳥インフルエンザが来て貰わないと困るんだよおっていう具合に言う訳ですよ。来てくれたら、お金が付くっていう、もう本当に、そういう人達、学者っていうのが集まりであるということ、まず、理解して戴くのが、私は第一歩だと思っていまして」

水島「絶望じゃないですか（苦笑）」

一同「（苦笑）」

掛谷「いや（笑）それで一言、まあ、希望っていう話で言うと、やはり、さっきの皇室の話にしても何にしても北海道の色々な話も、日本にとって最大の脅威は、やっぱり中国ですよ。もう皇室問題は明らかに中国が仕掛けてやっていると、私も思います。まあ、他のものもそうですよ」

水島「アメリカもやっているっていうね」

掛谷「まあ、アメリカもそうでしょうけど、やっぱりメインは中国じゃないかなと思います。それで、且つ、エネルギー問題なんかでも、その太陽光パネルをつけるというのも、明らかに中国ですよ。

やっぱり、いかに中国を弱体化させるかっていうことが、我々にとって最優先の話で、この番組でも何回も言っていますけど、新型コロナウイルスが中国の研究所から漏れたってということが証明されるっていうのは、もう最大のチャンスなんですよ」

石井「なるほど」

掛谷「だから、これで来年、米政府が公式見解を出すと、世界の反中化が多分、間違いなく起きます。だって、これだけ世界中の人が迷惑をかけられましたから、まあ、こんなんで、次は気をつけてねっとか言うのは、日本人ぐらいで（笑）」

一同「（笑）」

掛谷「アメリカ人とかヨーロッパの人とかそこらへんの人、もう絶対に許しませんよ」

水島「厳しいでしょう」

掛谷「何とかして復讐するっていうことで多分、世界の反中化っていうのが起きると思います。そこで気をつけなきゃいけないのは、中国もそれを分かっていますから、いかに、その中で味方を増やすか」

水島「うん」

掛谷「あ、なんか間抜けな国が近くにあるから、あいつだけは、ちょっと味方になるからとかと言って、今、外務大臣が…」

水島「岩屋でえ～すって言って」

掛谷「あ、ああ、そう、そうですね（笑）、だから多分、その積極的な取り込み作戦じゃないかなあと思っているんですよ。天安門事件の時は、それで上手くいった訳ですよ」

石井「うん」

水島「まあ、そうだね」

掛谷「但し天安門事件の時は日本が許して、まあ、陛下も行かれてということで…」

水島「まあ、カもあつたしね。訪中っていう、とんでもないことをやりましたね」

掛谷「そういうことになってしまった訳ですけど、他の国も、それに追随しましたけど、今回は追随しませんよ。何故かと言うと、天安門事件は中国人が犠牲者ですけど、今回は自分達が犠牲者ですから」

水島「うん」

掛谷「それで日本が中国にいくら靡いてやっても、世界は全然ですよ。ああ、あんた、そっちの味方だったのね、さようならっていうことになります。だから、私も今回、とにかく日本は中国の側に付かずに、新型コロナが研究所起源だと判った。もう中国は敵だ、こんなことをしやがってと言った時に、こんなことをしやがってと非難する側に付くと。

特にトランプさんは、そのせいで自分は再選が出来なかったっていう個人的な私怨もある訳ですよ。だから徹底的にやりますよ。だから今回のトランプ政権の閣僚は、新型コロナ研究所起源を言っている人達を大量に揃えていて、この前もお話しましたが、ジョン・

ラロクリフCIA長官からマーティン・マカリーというFDAの長官とか、その他沢山、居ます。ですから、ここに乗る。ここに乗ることが出来れば、今の皇室の危機の話も然り、そういう土地問題、中国人が土地買っている問題も然り、色んなものを防ぐことが出来るということで、これをする事で、来年は日本が是非、より良い方向に行って、守られる方向に向かう年になるといいなあという具合に、私は思っております」

水島「そうですね」

掛谷「はい。それを思いながら、良い初夢を見るっていうのは、いかがでしょうか」

竹内「それが、私、ちょっと…」

水島「ああ、どうぞ、はい」

竹内「いや、それがヤバイかもしれない。心配ですよ。天安門のあとの天皇訪中みたいなことが起きるんじゃないかと」

掛谷「ああ」

水島「いや、そういうことを利用する連中だし」

竹内「居るんです」

水島「正直な話、野田さんという人は、少し私も知っている、まあ、知っていると言うか、内容をね。一番、皇室に入り込んで女系天皇とかね、そういった自分では、いいことをやっているつもりでいる訳ですよ」

竹内「はい」

水島「でも、彼はそういう人間ですからね。それが石破も女系論ですよ」

竹内「はい」

水島「ね。あれもそうでしょう。だから女系連合がね、野田と石破で出来ちゃう可能性がある訳ですよ」

竹内「そう」

水島「一番、何かの形でね。それから夫婦別姓も全部、繋がっていますから、結局、皇室解体ですよ」

竹内「はい」

水島「戸籍制度の解消とかね」

吉野「そうそう、そうそう」

水島「さっき言った、日本のお父さん、お爺ちゃんという縦軸の時間軸の中の日本型の家族制度。だから、これを朝鮮や中国みたいに個人個人が別姓でね、結婚するっていうのは、こういうところに持って行きたいっていうねえ、とにかく、日本を特種な国じゃなくしてしまうっていうね」

掛谷「だから、かなり、そこに中国の影響力が政治家にも働いていると思うので、そこを

一気に断つチャンスが、私はコロナ研究所起源が証明されるというタイミングだと思うので…」

竹内「うん」

掛谷「このタイミングを絶対に生かさないといけないと思っています」

水島「そうですね。ただ、このねえ、ちょっと水差すようなことを言うと、私は北海道のところで覚えているんだけど、あれが武漢で始まったでしょ」

掛谷「はい」

水島「安倍内閣ですよ」

掛谷「はい」

水島「それで何をやったかって、雪まつり」

掛谷「はいはい、はい」

水島「大量に入れたんですよ」

掛谷「そうですね」

水島「何を馬鹿なことをやっているんだあって言うんだけど、安倍内閣、入れたんです。それで案の定、雪まつりに中国人も武漢からも沢山、来た。それで何が始まったかって言うと、もう、あそこで広告代理店の世話をしている連中が、みんな、感染して、うちの連中にも取材なくていいから、みんな、引き揚げろと言ったぐらいのところで、我々はそういう警告をちゃんと受けても、事実を判っても、やってしまう」

掛谷「そういう意味で言うと、そういう観点での懸念で言うと、私は、この話をすると、いや、だってアメリカの研究機関も協力している訳ですよ。実は新型コロナを作ったのは、あのノースカロライナ…」

水島「ファウチだってお金を出したって」

掛谷「そうそう。ノースカロライナ大学のラルフ・バリック (Ralph S. Baric) もそうだし、そのファウチもお金を出した。さっき感染研の話で、緘口令になったのは、そのファウチの圧力の可能性が高いと、私は思っているんですね。だから、アメリカも傷があるから、アメリカは厳しいことを言えないのではないかと」

竹内「うん」

掛谷「恐らく日本が国を閉めなかったっていうのも、アメリカは2月1日か2日に中国からの入国を止めた訳ですけど、ファウチは最後までそれには反対していましたよ。それをトランプが押し切ったんですね」

水島「うん」

掛谷「ひょっとすると安倍さんも、その辺のアメリカの保健機関からの圧力があつた可能性があると思いますね」

水島「考えられますね」

掛谷「そうすると、アメリカも傷があるから、あまり厳しい事を言えないんじゃないかと言われますが」

竹内「うん」

掛谷「その辺の人達ってファウチを含めて全員、民主党系の人ですよ。あの辺の民主党の議員は公聴会でもファウチを守っていました。なので、逆にトランプとか、その周りの人はガンガンにやる気の人が多いので、私は、アメリカと言っても民主党系の人達が協力しているので、逆に国内の敵も潰すチャンスという具合にトランプは見ると思うので、私は早々に研究所起源を証明して、まあ、アメリカも協力したりしたけど、それは民主党の奴だったみたいな話に持って来ると思うので、そういう形で、まあ…」

水島「証拠を出すっていうことは大事ですもんね」

掛谷「はい。証拠を出してくると思いますので、そこはあると、私は期待していますし、だから、それを、私も研究所起源に関しては、かなり科学的な証拠も色々集めているので最大限、応援していきたいという具合に思っています」

水島「そうですね。これが今度、エボラ出血熱のね」

掛谷「うん」

水島「村山にあったのを都内の厚生労働省に近いところに、未だ場所は特定して言っていないんですけども、持って来るって」

掛谷「あ、だから、もう一つの私の懸念点は、じゃあ、次のパンデミックを起こしたろうという具合に…」

水島「お前、武漢のこと責めることが言えるのかと」

掛谷「ええ」

水島「おめえがやっているじゃないかと。それで今、これは、まあ、非公式ですけど、アフリカで今、流行り始めているのも実際に人為的なものでやっているんじゃないかと。風邪に似た症状で若者達が死んでいるとかね。これ、エボラ出血熱、なんでアフリカの地方病で、それは大変、致死性の強いものだけど、何故、日本で研究するんだと」

掛谷「いや、実は2014年に西アフリカでエボラが流行ったんですけど、これは研究所起源の可能性が高いって言われています」

水島「ほらね、やっぱり」

掛谷「はい。そうですね。実は、この前、淡路島で、新型コロナを作った仲間の研究者が集まった会議をやるっていう話は、会議が行われる前に、ここでお話したと思うんですけど、その時、私は発表の申し込みをしたら、発表だけじゃなくて参加も拒否されたと。

それを聞いたアメリカの、まあ、彼はイギリス人ですけどジョナサン・レイサムっていう学者の方が、じゃあ、俺が代わりに行ってやるぞという具合に言って発表したんですよ。彼の話は一見、研究所起源説に見えないので上手くそこに入ったんですけど、ポスター発

表をしていたら、向こうの科学者がそれを気づいて1時間位、ずうっと彼を怒鳴りつけていたらしいです」

水島「ああ〜」

掛谷「うん。そういうことが起きた」

水島「怒鳴りつけたっていうのは、ヤジを飛ばしたっていうことですか」

掛谷「うん。要するに発表を妨害したんです。だからフランスのテレビ局のクルーも居たらしいですけど、そういうことがあったと。まあ、菌ウィルス学者って基本的にそういう奴らで、もうヤクザですよ。実は、彼はウィルス学者でもあり遺伝学者でもあるんですけど、当時、何処でどういう株が、いつ見つかったみたいなものを分析すると、ギニアって言われているんですけど、実はシエラレオネの方が、ぱあっと広くて、最初は、止まっているんですけど、普通に外挿をしていくと、もっと先にシエラレオネで出たという具合に見えると。

そこにアメリカがしているエボラの研究所がある。他にもいくつか証拠があるんですけど、そういう遺伝学的な解析をすると、まあ、それで、実は、そこで、そのエボラの研究をしていた人の一人がロバート・ゲリーっていう人で、彼は今回、エボラとかの専門家なのに、新型コロナを天然起源だっていう論文がネイチャー・メディシンに最初に2020年の3月に出たんですけど、その著者の一人ですよ。実は、今回、その論文の著者と呼ばれた人って、さっき言ったバリックは、コロナウィルスの専門家ですけど、そうでない別のウィルスのエボラみたいな専門家の論文ですね。それって研究所起源じゃなくて、これは天然だっていう論文。彼らはその時の2014年のエボラ研究所起源を上手く隠したメンバーですよ。だから隠蔽のプロを集めて来たんですよ」

一同「(笑)」

掛谷「それで論文を書いているっていう」

水島「いやいや。いやねえ…」

掛谷「はい」

水島「これ、本当に具体的に詳しいお話だと思うんだけど、素朴な疑問として何故、東京のど真ん中の厚生労働省に近い所でって、もしかしたら洩れる可能性がある訳ですよ」

掛谷「それは洩れた時に解り難いからですよ。要するに人が沢山、だから武漢もそうですよね」

水島「ああ、そうかあ」

掛谷「人口が少ないところだと、それは研究所から漏れたって解り易い」

水島「ああ、判っちゃう」

掛谷「人口が多いところだと、研究所から漏れたか旅行者が持ち込んだのか判らないから」

水島「ああ〜なるほど。それは凄く大事な指摘ですよ」

掛谷「そうですよ。うん。だから人口が多いところでやりたいんです」

水島「普通は孤立した島で、研究所を立派に造ってやればいいのに。ああ、そうだね」

掛谷「あと、もう一つは、研究者が便利な所に住みたいっていう、そういう下らない要求ですよ」

水島「まあ、そっちですか（苦笑）」

竹内「だから新宿な訳ですね（苦笑）」

掛谷「だから、私は原子力の学者って素晴らしいと思いますよ。だって、ちゃんと、そういう田舎、東海村に行ったり、或いは、六ヶ所村に行ったりする訳ですから」

水島「ああ、みんな、そうですね。うん」

掛谷「この前、実は核融合の研究を30年やっている若い学者3人ぐらいに会ったんですけど、目が輝いて素晴らしいなあと思ったんですけど、本当にウィルス学者の目が淀んでいて…」

一同「(笑)」

掛谷「核関係の科学者は…」

水島「まあ、これは、あくまでも個人的な意見ということで（苦笑）」

掛谷「はい」

水島「ああ、ほんと、結果的にそうですね」

掛谷「その科学者に会って話をして心を入れ替えて貰う、少しは心を洗って戴かないと、本当に日本のウィルス学、生物学、私はちゃんと学会にも出て色々交流した上での感想ですけど、だって、その証拠にさっき言った緘口令が敷かれたっていうことを何も心に疚しいことがないかのように、ぺらっと言ってしまっっていうことは、悪い事をしていると思っていない訳ですよ」

水島「そうだな」

掛谷「だから、彼らの良心の感覚は完全に麻痺していますよ」

水島「分かりました」

掛谷「そうです」

水島「よく解りました」

掛谷「この本にもあるんですけど、昔、感染研は富山庁舎って言って今の新宿に移転する時にも反対運動があったんですよ。それで、その時に所員なのに反対した方が居て、その人が書いた本ですけども、この人は、やっぱり日本のそういうウィルス学とか微生物学が、そもそも731部隊の人達が戦前、そういう人体実験を含めた研究をやっていたものを、アメリカに全部、成果を提供することで免罪されたと。

そうした人達が日本中の大学の教授になったり、感染研って、これは元々東大の伝染研で

すよ。それが今の医科研と、東大の医科研と感染研に分かれたんですけれども、東大の医科研でも、今、そういう鳥インフルエンザを哺乳類にも感染するように変えるような研究をしている河岡先生という先生が医科研で」

水島「なんとなく脱力していく感じもあるんですけどねえ、時間が段々無くなって来たので纏めに入りたいと思うんですけど、それぞれ皆さんが今年、来年のこと、日本のこと、世界のこと、本当に思うこと、一つ、お話し戴きながら終わりたいと思います。今回は、またモーガンさんから」

モーガン「はい」

水島「すみません、じゃあ、モーガンさんから纏めのお言葉を戴けますか」

モーガン「はい。1年間、本当に大変、お世話になりました。スタジオにお集まり戴いている方々のお世話にもなったし、もう今年は本当にチャンネル桜の存在が私にとって大きかったです。先程、石井先生のお話の中で、ヴァンスと海兵隊の言葉が出たかと思いますが、私は、それ自体がおかしいと思います。

おかしいと言うのは、貧しい人が海兵隊に入ってイラクまで行って侵略戦争の為に頑張っていて、そうやって出世が出来るという、その体制自体が私からすれば非常におかしいと思っています。アメリカに生まれてアメリカで育って、ずっと、それは当然なことだと思って、日本に来てアメリカが日本に対して何をやったかと、少しずつ勉強をすればする程、少しずつ解るようになって、その海兵隊に入って全く関係のない外国まで行って外国人を殺すっていうことが出世の一つの方法だと」

水島「はい」

モーガン「私は今、当然だと思わないし、500年間、白人が非白人を殺して普通に出世できている」

水島「うん」

モーガン「大英帝国もそうだったし、フランス、スペイン、ポルトガル、まあ、みんな、やったし、ドイツもそうやったし、ベルギーもやったし、その時代が終わりつつあると思います」

水島「うん」

石井「なるほど」

モーガン「日本国内でもアメリカの傭兵が日本に居て、それは当然なことだと庇っている拝米保守も山ほど居るし、そいつらの考え方はおかしいし、私からすれば日本人じゃないと思っていますし、一方、新しい1年に入って国民の怒りと国民の覚醒が日々増すのではないかと思って、そうすると、今、吉野先生がおっしゃった通り日本人が日本人に戻れば何をやるべきかと、当然、自然に解るようになるかと思っています」

水島「うん」

モーガン「今迄の500年間のシステムが死にかけています。私は、それを大歓迎すべきだと思います。これから一極体制が終わって多極体制になるので、アメリカが多分、バラ

バラになってしまう。それはいいことですし、逆にそれと同時に日本が、また一つの国民になることを、私は大きく期待したい1年がこれから始まろうとしていると思います」

水島「なるほど。有難うございます。では、室伏さん、お願いします」

室伏「はい。もう色んな事を喋っちゃったので纏め的に申し上げますと、先程、吉野さんが日本人は日本人であることっていう風なことをおっしゃったんですけど、本当に、その通りで日本人が日本人であるっていう自覚が薄いとか、あと、私は以前、何処かでも言ったと思うんですけど、今の若者でも、日本とか日本人って言うとヤバイとか危険っていつて逃げるんですね。いや、そういうあなたの頭が危険だろうと思うんですけど（失笑）」

一同「（苦笑）」

室伏「いや、それぐらい、何か国民意識とか、日本人意識っていうものを希薄にさせるような教育、これは下村脩も著書の中で、そういうことを書いていますけど、それをされてきた。やっぱり本当に、これを取り戻さないと、おっしゃる通り日本の為に、これをやろうっていう政策の話をしたとしても、結局、どうなるかって言うと、何処かの大臣みたいに、これの方が俺の懐が温かそうになるよねと言って平気で売国行為をすると。だから、結局、売国政策をやったりとか外国勢力と手を握っちゃったりって大体、そういうところじゃないですか。

だから、やっぱり本当におっしゃる通りそうだよなと。そこを同時にやっていかないと、これから来る世界的な、いい意味でも大転換という状況を、僕は乗り切れないだろうなあと思っていて、それが無いと恐らく関税がっていう当たり前の、まあ、要するにWTOではなくて昔のガットぐらいの貿易体制っていうか、そういうところに、また戻っていくんだと思うんですけど、そうなった時に恐らく日本政府だとか経済産業省とか、あとは主流派経済学者であるとかエコノミストと称する人達だとか、大企業の方々は何を言うかって言うと、日本が自由貿易の旗手になって、これは守るんだあって言って、関税を低くして、要は、自ら外国勢力の鴨になるっていう、鴨が鍋とネギを背負って行くみたいなことになると思うので、やっぱり日本はどうすべきかっていう考え方をする。

つまり、私は日本人だと、日本の為にやるんだっていう意識があれば、そうならないはずですよ。世界の為にやれば、日本は、みんなに認めて貰うだろうみたいな、そういう発想は、もう、これも同じような話を別の言い方をしているだけになっちゃうかもしれませんけど、来年には出来る限り完全に捨て去って、日本は日本人なんだ、我々は日本人なんだということを堂々と言わないと、おかしいと思うんですけど、堂々と言う人が、より多くなるように、私も微力ながらやっていきたいと思います」

水島「今の話で思いついたのは、英国がTPPに入ったじゃないですか」

室伏「はい」

水島「これは、やっぱり、ちょっとね、それを踏まえて考えると、色々意味が出て来るなというのが、よく解りますね」

室伏「結局、ブレグジットしちゃったので新しいマーケットを求めるって、それだけの話ですから、何故、それで日本の国防が良くなるとかね、意味が解らないじゃないですか」

水島「全然、解らないですよね」

室伏「はい」

水島「そっちじゃないですもんね」

室伏「あれも全然、関係ないです」

水島「英国は本当に強かにTPPを使いますよ」

室伏「はい」

水島「はい、有難うございます。では、石井さん、お願いします」

石井「皆さんの日本があるべきという話は非常に肯定ですけども、まあ、ちょっと取り込み方をケースごとに向き合っただけで、日本があらゆることで、それが弱くなっている事は確かです。例えば、このクルド人問題だって、川口の町が弱まってしまったから、こんなことになっている訳で、外国の力を適切に、今みたいに正にパープリンで鴨になるような、外国に開国ではなくて、上手くコミットメント、世界の流れにするような賢さを必要とするのがあって、移民問題とエネルギー問題の話を言うと、移民問題が盛り上がったんですよ。良くも悪くもクルド人を、きっかけにですね」

水島「そうですね。確かにそうだと思いますね」

石井「実は狙っていたことでもあるんですけども、それをきっかけに議論を始めて、日本の国の在り方を外国人労働者の問題で考える1年にしたいなあと期待しているところがあります。実は、誰も言っていないように、参政党と保守党には色々な意見がありますけれど、合わせて600万票ですよ」

水島「うん」

石井「凄いなんですけども、その人達が移民と言って、かなり意見を言ったってということは、この問題を取りあげざるを得なくなる状況になりつつあるのかなあと思います。それで大きい話ではなくてクローズした論点ですけども、来年は、それを議論にしたいなあというのと、あと同時に怖さ、日本のダラダラした、さっき言った、みんなが逃げちゃう、蜘蛛の子を散らすように役人も政治家も逃げちゃうような状況の中で、形にするのは怖いなあ、出来るのかなあという心配があります。

二点目のエネルギーは、ちょっと複雑で先が読めません。さっきのトランプ要因も言ったように、その中で出来ることはやって欲しいなあ。自前電源で再エネをやめる、あと、原子力を動かすという基本的なことぐらいはやりましょうよということは、この1年で、動かしたいなあと思います。

あとモーガンさんの視点でハッと気づいたのが、貧しい人が兵役に行っただけで儲かるってのは当たり前なことだと思っていたんですけども、考えてみると、これは恐ろしい事ですよ。人を殺してハッピーだっていう話です」

モーガン「(頷く)」

石井「まあ、そのヴァンスは実際には最前線に出てないですけども」

水島「うん」

石井「それを見る、ああ、自分でも知らない内に変な頭の塊が出来ていて、そういう柔らかい視点っていうのを、もう一回、今日の話も含めて固定観念ではなくて、持ち直したいなあと思っております」

水島「はい」

石井「有難うございます」

水島「有難うございます。では、掛谷さん、お願いします」

掛谷「はい。そうですね、私も日本という話は、実は、さっき触れなかったんですが最後に触れさせて戴くと、やっぱり日本を意識するって外国に出るタイミングだと思うんですよ。この番組で一度、ご紹介したかもしれませんが6～7年前、当時の学生が3週間ぐらいですけど短くアメリカに短期留学でホームステイして、帰って来て、どうだったって聞いたら色々ホスト・ファミリーに日本のことを聞かれたって言ったので、どんなことを聞かれたのと聞くと、日本は天皇って居るけど、名前は何ていうのって聞かれたけれど、答えられなかったって」

一同「ああ～」

掛谷「当時は今の上皇陛下が未だ御在位の時でしたけれども、私は勿論、お名前を知っているんですけど、まあ、知らなくてもいいけど、何故、答えられないかを考えて、それを答えなきゃいけないんじゃないか。まず日本人は偉い人のファーストネームは知らないでしょ。パーソナルネームで呼ばないから。だから陛下のファーストネームを知らないっていうのはそういうことだろう。じゃあ苗字は？苗字が無いって言うでしょ。じゃあ、何故、苗字がないかって、そういうことから彼に色々皇室の話をさせて戴いたんですけど。

だから、そうやって外国に行くと日本って何だろうって感じるきっかけになる。だから、残念ながら、日本は今、非常に貧しい国になっていて、外国に行った方が技術者でも給料5倍とかになるので、今後、多分、優秀な学生は、どんどん外国に出て行くことになると思います。そんな中で、多分、外国に出て行けば、日本っていうことを意識するようになると思うし、且つ、同時に移民問題で、今、国内に居ても外国人がかなり増えて来ているので、そういうものを、きっかけにして、残念ながら、やっぱり今の若い人は、そんなに日本はどうだっていうことを考えている人は、殆ど居ませんが、そういうことを考えるきっかけを増えていくと思います。

私が勤めている大学も幸い悠仁殿下がいらっしゃるということで、この前、お話ししたんですけど、これを映して下さい。これは学校の校章ですけど五三の桐ですよ。この校章の由来を知っているかという話を聞いてみたんですけど、みんな、知らなかったです。これは桐の紋章って勿論、皇室の紋章で、これは明治天皇が教育は大事だからと筑波大って元々東京高等師範学校なので、それで桐の紋章を下賜され戴いたものだけど、さすがに五七の桐は恐れ多いので、葉っぱの数を減らして五三の桐にしたということですよ

水島「なるほど」

掛谷「だから、そんなことを話す機会も今後、増えると思うので、そういう意味で言うと、国立大学で比較的、大きい大学院に行って、まあ、そういう話を出来る機会が若い人の中でも増えるといいなあっていうようなことを思っています」

水島「なるほどね。はい。そういう風に悠仁殿下とお会いする機会がある。私は行ったことが無いけど、キャンパスは広いんでしょう」

掛谷「物凄く広いんですけど、殿下は生物学部内にご入学されて我々は工学系ですけど、その間には天の川と言われる、ちょっと小さい川と言えないんですけど、小川の向こう側が生物系なので女性が多いと。こっち側は男ばかり居て、そういうところ、まあ、そんなに遠くはない所に通学される」

水島「生物系のね」

掛谷「はい、そうです」

水島「なるほど。本当に安全は、どんなことがあっても、ちゃんと警備して貰いたいと思いますね」

掛谷「だけど、高校時代もいい御学友に恵まれたので」

水島「それは良かったですね」

掛谷「まあ、筑波も本当に朴訥とした善い学生が多いので、大学でも、良い御学友を沢山、つくれるといいかなあと思っています」

水島「本当に悪意とか悪質な意地悪とかああいうのは一切、感じられなかったですよ」

掛谷「はい」

水島「やっぱり、みんなから好かれるものがあるのでしょうかね」

掛谷「はい」

水島「はい、有難うございます。じゃあ、吉野さん、お願いします」

吉野「はい。僕も東京医科歯科大学というところで17年間、学者をやっていたんですけども、僕が入った頃ですから、1990年代ぐらいから科研費、科学研究費というんですけれども、これを貰うのに業績を出さないと貰えなくなってルールが変わったんです」

水島「うん」

吉野「昔は、例えばABCDEFって口座があったら3千万、3千万、3千万、3千万、こういう貰い方していたんですね。だから一生懸命、やりたい教授は、それを何とかやりくりして研究をしようとしていたんですけども、酷い奴になると朝から酒を飲んでいるような人も居た訳ですよ」

水島「なるほど（笑）」

吉野「でも、答から言うと、それが良かったんですね。要するに研究費を貰う為だったら、どんな卑怯な事でもするっていうのが出来なかった」

掛谷「（頷く）」

水島「なるほどねえ」

吉野「昔の湯川秀樹博士も霞を食いながらでも日本の為にやりたいと。何十年かけても、

研究したいっていうのが、今直ぐ金が入るっていうルールが変わったのは1990年代ですね」

水島「ああ〜…」

吉野「だから、僕はいつも言っています、元に戻すんですよ。元に戻すと、いつも言っているんです」

水島「いいね、それね」

吉野「その医科歯科大っていうのは東工大と一緒にあって東京科学大学ってなっちゃいましたけども、それがいい悪いという以前に大学研究債っていう株を発行する訳ですよ」

水島「うん」

吉野「その金で研究するっていう愚かな大学を創った訳ですよ。そうすると株主に都合のいい研究しかしないのを大学ぐるみでやるという…」

水島「ああ、そうだねえ」

吉野「もう掛谷先生が良くないって言っていましたが、もう大学そのものが何かこういう禿鷹ファンドみたいなシステムになっちゃったんです」

一同「(苦笑)」

吉野「だから元に戻すんですよ。日本の凄いところは、まあ、研究っていうのは私もそうだったですけども99.5%ぐらいは役に立たないものです」

水島「うん」

吉野「それで10年とか20年経つと、やっていたこと自体に意味があったっていうのがあって、実際、それでノーベル賞で当たるみたいなことは、あまり無かった訳ですが、それが日本の国を科学技術立国にする為にやっていた凄く良いシステムだった。だから、その為に駄目な教授が多少出るのは仕方がなかった訳ですよ。それを真面目にやれっ、真面目にやれっ、真面目にやれとやったことが、こうやって金が貰えて研究が出来るんだったら、どんな嘘をついてもいいっていうシステムにしちゃったの」

水島「ねえ…」

吉野「だから、絶対に1980年代より前に戻さなきゃいけないと思っています」

水島「うん。これねえ、亡くなられた西尾幹二先生が西洋のことを否定的に結構、やっているんだけど、一つだけ凄いのがあると。今、どうか判りませんが、大学制度だと。これだけは自由でね、日本のようにガチガチで動きの取れない、さっき掛谷さんが言ったように金さえ出ればいいみたいなね、こういうものじゃなくて、その大学制度は、大変に良かったと」

吉野「うん」

水島「これが学問の自由でね、西洋の中で認められる自由の概念で言うと、そこだけは、良かったって書いているのを…」

吉野「だから、何故、国立大学が素晴らしかったって言ったら、税金で我々の将来の為、50年、場合によっては100年とか200年先の為に研究している人達が学者をやっていたんですね」

水島「うん」

吉野「それが自分の研究だけしたい人達だけが金を貰う為にやるように、掛谷先生、そう なっちゃったんですね（失笑）」

掛谷「（頷く）」

吉野「だから倫理観が凄く下がったんですよ」

水島「ああ。だから一見、役に立たない無駄なような研究でもやるのが大事ですね」

吉野「そうですよ」

水島「その人にとってね、一生懸命。なるほどね。はい、有難うございます。竹内さん、お願いします」

竹内「えーと、まあ、私、年齢順で並んでいるだけなので、何か大御所みたいに思われると困るんですよ（笑）」

一同「（笑）」

水島「あのう、すみません、一応」

竹内「一応ね、ええ」

水島「前ね、この並びは女性にとっておかしいとか言われましてね。つまり年齢順からいくと歳がバレるじゃないかと」

竹内「ああ〜っ！」

水島「竹内さんは認めてくれて、ああ、さすがだなあと思ったんですけどね」

竹内「いえいえ、いやいや（笑）」

一同「（笑）」

水島「はい」

竹内「いや、そんな歳のことは、もう超越していますから」

水島「なるほど（笑）」

竹内「はい。いや、もう…」

水島「有難うございます」

竹内「今日、お話を伺っていて、どうも来年っていうのは日本人が日本人として覚醒する草莽崛起の年になるであろうという、その、まあね、ざっと考えるとそうみたいですが、その中であって、私は、まず良い方向に向かうなと思うのは、また皇室の話になりますが、悠仁親王殿下が加冠の儀を迎えられる」

水島「うんうん」

竹内「そうすると今迄と違って、日本人が本当に悠仁殿下を初めてしっかりと目の当たりにすると思うんです」

水島「うん」

竹内「お言葉も述べられるでしょうし、そして、まあ、お前は轟頂の引き倒しって言われるんですけど、多くの皇室ウォッチャーが、どうも悠仁さまって、ちょっと神がかっている神聖な不思議な方だなあと言っていますけど、私もそう思うんですよ」

水島「うん」

竹内「これは轟頂の引き倒しっていうよりも、例えば筑波大付属に入学した時だって裏口入学だの、作文も盗作だの下世話なことを、いっぱい言われてね」

水島「そうでしたねえ」

竹内「この方は、どうなるんだろうと思ったんだけど、入学の時のインタビューで、全く超然とされていたんですよ」

水島「そうでした」

竹内「そういうものに対して、あの時、私は物凄く心配したけれども、この方は大丈夫なんじゃないかって思いましたし、だから筑付の生徒達が、悠仁、善い奴だとかね、頭が良くて優しいとかいうものがありました。ひー君が東大に推薦入学なったとしても、全然、不思議には思わないとか」

水島「うん」

竹内「それから彼は理科が物凄く出来るよとか、もう、いっぱい、そういう話を聞いていても、やっぱり、この方は日本を救うかもしれないなっていう風に思います」

水島「うん」

竹内「それが、まず来年の大変な楽しみのひとつです」

水島「はい」

竹内「もう一つ、ちょっと心配になって来たのは先程、掛谷先生がおっしゃっていた中国が研究所から流出させたって世界から非難されると」

掛谷「(頷く)」

竹内「そこで、また天安門と同じように、また同じ構図になるんじゃないかと。天安門の後、天皇訪中となって、中国を許してしまい…」

水島「うん、本当に思い出しますね」

竹内「ね」

水島「うん」

竹内「それは、もう阻止しなくちゃいけないと。今はかつてと違ってSNSの力がありますよね」

水島「うん」

竹内「先程、石井先生もSNSで救われたとおっしゃっていますし、これは、やっぱり、私も含め多くの方はSNSの力でもって、これからは阻止すべきものは阻止していかなくてははいけないという風に思いました（礼）」

水島「なるほど。はい。というようなことで、今日、大晦日に、皆さんに、こういうお話をさせて戴きました。来年は戦後80年、昭和で見たら100年、こういった年を迎えます。よく60年周期説とか80年周期説ということが言われますけど、我々が長い日本の世界最古の歴史の中で見た時、外国人の軍隊が80年も我が国の国土に居座った時代っていうのは一回も無いです。我々のこの80年間、そういうことをどういう風に感じるのか。しょうがないだろうというのもあれば、やっぱり、靖國の英霊の皆様に申し訳ないという風に感じるか、色んな感じ方があると思います。

ここまで続けて来た戦後80年間、私は大体、戦争直後に生まれていますから75ですけども、ほぼ、その時代を生きて高度成長から駄目になって空白の30年とかも味わって来ていますけども、やっぱり一番、失われたものの寂しさというのは、何処の江戸の文化も見て解るように無常というね、行く川の流れば絶えずして、しかも元の水にあらずという無常、でも明るく楽しく生きられる日本人、つまり人間は死ぬものだよと。死ぬものだけでも目いっぱい生きる時は力いっぱい、命いっぱい生きようじゃないかというね、こういう肯定性で、今言ったニヒリズムにはならないですよ。だから無常というのは、決して西洋的に言う虚無、ニヒリズムではないというところの我々の国の在り方を、さっき吉野さんが言ったけど、もっと日本人のいいところを子供達に教えてあげたいということを見せないことじゃないというね、我々は核家族化したから、お爺ちゃん、お婆ちゃんの死体とか息を引き取る場所を見られなくなっている。

それから日本のメディアは本当に死体を絶対に写さないですよ、写真でね。残酷だからという理由で。でも本当に必要な時は、こういう状態だよって、実は見せる必要もある。私は自分のチャンネルは最初、衛星放送で始めて大失敗したんですけども、その時は、必要な遺体というのは見せようということをやりました。それは本当に大事な事だと思います。

人間のごく当たり前にある命、生と死っていうものを子供達には、ありのままを見せて、でも、どうやってフォロー出来るかっていうのも大人のことだなあと思いました。何かね、幼稚化しているなあっていう感じがして困るんですけどね（失笑）、男はしっかりしましょう。女性も、もうちょっと優しくしてくれると嬉しいなという気がします（笑）」

一同「(笑)」

水島「はい。ということで、今日は以上です、皆さん、有難うございました。良いお年をお迎え下さい（礼）」

一同「どうも有難うございました（礼）」

\*\*\*\*\* お わ り \*\*\*\*\*